

基本計画書

基本計画書								
事項	記入欄							備考
計画の区分	学部の設置							
フリガナ設置者	コクリツダガクホクジン シズカダガク 国立大学法人 静岡大学							
フリガナ大学の名称	シズカダガク 静岡大学 (Shizuoka University)							
大学本部の位置	静岡県静岡市駿河区大谷836							
大学の目的	静岡大学は、学術・文化の研究並びに教育の機関として、広く一般的教養を授けるとともに深く学術・教育の理論及び応用を教授研究し、平和的な国家及び社会における有為な人材を育成し、その教授研究の成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与することを目的・使命とする。							
新設学部等の目的	本学部は、地球規模の課題から地域社会の課題に至るまで、社会的課題が複雑多様化する現代社会の状況を踏まえ、多様な人々と協働した取り組みの下、人文・社会科学から自然科学に至る広汎な知をつなぐことで、複眼的な視点から社会的課題を捉え「総合知」を創造・活用し、未来社会を活力と魅力溢れるものとして構想できる「共創型人材」を育成することを目的とする。							
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	取容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地
		年	人	年次人	人		年 月 第 年次	静岡市駿河区大谷836
	グローバル共創科学部 (Faculty of Global Interdisciplinary Science and Innovation)		115	-	460			
	グローバル共創科学科 (Department of Global Interdisciplinary Science and Innovation)	4	115	-	460	学士(学術) (Bachelor of Arts and Sciences)	令和5年4月 第1年次	
計		115	-	460				
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)	<p>【学士課程】</p> <p>人文社会科学部</p> <p><u>社会学科〔定員10減〕(入学定員60)(令和5年4月)</u></p> <p><u>言語文化学科〔定員6減〕(入学定員69)(令和5年4月)</u></p> <p><u>法学科〔定員6減〕(入学定員84)(令和5年4月)</u></p> <p><u>経済学科〔定員13減〕(入学定員142)(令和5年4月)</u></p> <p>教育学部</p> <p><u>学校教育教員養成課程〔定員40減〕(入学定員260)(令和5年4月)</u></p> <p>情報学部</p> <p><u>情報科学科〔定員2減〕(入学定員98)(令和5年4月)</u></p> <p><u>行動情報学科〔定員1減〕(入学定員69)(令和5年4月)</u></p> <p><u>情報社会学科〔定員7減〕(入学定員68)(令和5年4月)</u></p> <p>理学部</p> <p><u>化学科〔定員4減〕(入学定員48)(令和5年4月)</u></p> <p><u>生物科学科〔定員4減〕(入学定員48)(令和5年4月)</u></p> <p><u>地球科学科〔定員2減〕(入学定員48)(令和5年4月)</u></p> <p>工学部</p> <p><u>機械工学科〔定員8減〕(入学定員160)(令和5年4月)</u></p> <p><u>化学バイオ工学科〔定員2減〕(入学定員110)(令和5年4月)</u></p> <p>農学部</p> <p><u>生物資源科学科〔定員10減〕(入学定員105)(令和5年4月)</u></p> <p>【大学院修士課程】</p> <p>山岳流域研究院〔新設〕(入学定員7)(令和4年4月事前相談)</p>							

教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数			
		講義	演習	実験・実習	計				
	グローバル共創科学部	104科目	71科目	13科目	188科目	124単位			
教	学部等の名称		専任教員等					兼任 教員等	
			教授	准教授	講師	助教	計		助手
新 設 分	グローバル共創科学部		13人 (13)	9人 (9)	3人 (3)	2人 (2)	27人 (27)	0人 (0)	102人 (102)
	計		13人 (13)	9人 (9)	3人 (3)	2人 (2)	27人 (27)	0人 (0)	— (—)
員	既								
	人文社会科学部								
	社会学科		17 (17)	3 (3)	1 (3)	0 (0)	21 (23)	0 (0)	13 (13)
	言語文化学科		13 (14)	2 (3)	5 (5)	0 (0)	20 (22)	0 (0)	24 (24)
	法学科		13 (12)	1 (3)	3 (3)	0 (0)	17 (18)	0 (0)	10 (10)
	法学科（夜間主コース）		9 (9)	1 (2)	1 (1)	0 (0)	11 (12)	0 (0)	1 (1)
	経済学科		14 (14)	0 (5)	6 (6)	0 (0)	20 (25)	0 (0)	7 (7)
	経済学科（夜間主コース）		11 (8)	0 (5)	1 (1)	0 (0)	12 (14)	0 (0)	2 (2)
	教育学部								
	学校教育教員養成課程		34 (42)	33 (33)	15 (12)	3 (3)	85 (90)	0 (0)	135 (138)
	情報学部								
	情報科学科		12 (12)	7 (7)	5 (5)	3 (3)	27 (27)	0 (0)	123 (123)
	行動情報学科		6 (8)	6 (6)	1 (1)	4 (2)	17 (17)	0 (0)	130 (130)
	情報社会学科		8 (10)	5 (5)	4 (4)	6 (4)	23 (23)	0 (0)	124 (124)
	理学部								
	数学科		4 (4)	4 (5)	2 (3)	0 (0)	10 (12)	0 (0)	2 (2)
	物理学科		5 (6)	6 (6)	2 (1)	0 (1)	13 (14)	0 (0)	3 (3)
	化学科		5 (5)	7 (8)	2 (2)	0 (0)	14 (15)	0 (0)	4 (4)
	生物科学科		5 (6)	7 (7)	3 (3)	1 (1)	16 (17)	0 (0)	5 (5)
	地球科学科		4 (5)	8 (8)	1 (1)	1 (1)	14 (15)	0 (0)	7 (7)
	工学部								
	機械工学科		13 (19)	21 (21)	0 (0)	13 (7)	47 (47)	0 (0)	234 (243)
	電気電子工学科		9 (11)	11 (12)	0 (0)	10 (7)	30 (30)	0 (0)	244 (252)
	電子物質科学科		13 (19)	15 (16)	0 (0)	13 (6)	41 (41)	0 (0)	234 (241)
	化学バイオ工学科		9 (12)	16 (19)	2 (2)	10 (4)	37 (37)	0 (0)	234 (240)
	数理システム工学科		8 (9)	11 (11)	0 (0)	3 (2)	22 (22)	0 (0)	246 (254)
	農学部								
	生物資源科学科		14 (14)	18 (18)	0 (0)	8 (8)	40 (40)	0 (0)	43 (43)
	応用生命科学科		13 (13)	9 (9)	0 (0)	5 (5)	27 (27)	0 (0)	14 (14)
	計		239 (269)	191 (212)	54 (53)	80 (54)	564 (588)	0 (0)	— (—)
	合計		252人 (282)	200人 (221)	57人 (56)	82人 (56)	591人 (615)	0人 (0)	— (—)

教員以外の職員の概要	職 種		専 任	兼 任	計					
	事 務 職 員		445人 (445)	38人 (38)	483人 (483)					
	技 術 職 員		101 (101)	5 (5)	106 (106)					
	図 書 館 専 門 職 員		16 (16)	0 (0)	16 (16)					
	そ の 他 の 職 員		128 (128)	33 (33)	161 (161)					
	計		690人 (690)	76人 (76)	766人 (766)					
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計					
	校 舎 敷 地	282,046㎡	- ㎡	- ㎡	282,046㎡					
	運 動 場 用 地	84,654㎡	- ㎡	- ㎡	84,654㎡					
	小 計	366,700㎡	- ㎡	- ㎡	366,700㎡					
	そ の 他	3,754,640㎡	- ㎡	- ㎡	3,754,640㎡					
	合 計	4,121,340㎡	- ㎡	- ㎡	4,121,340㎡					
校 舎		専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計					
		183,227 ㎡ (183,227 ㎡)	- ㎡ (- ㎡)	- ㎡ (- ㎡)	183,227 ㎡ (183,227 ㎡)					
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	大学全体				
	145室	135室	521室	12室 (補助職員0人)	9室 (補助職員0人)					
専任教員研究室		新設学部等の名称		室 数						
		グローバル共創科学部		27 室						
図書・設備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	図書、学術雑誌、電子ジャーナル及び視聴覚資料は、研究科単位での特定不能なため、大学全体の数		
	グローバル共創科学部	1,213,000 [350,450] (1,206,585 [348,949])	20,715 [6,560] (20,647 [6,551])	5,500 [5,488] (5,489 [5,477])	(6,605)	0	0			
	計	1,213,000 [350,450] (1,206,585 [348,949])	20,715 [6,560] (20,647 [6,551])	5,500 [5,488] (5,489 [5,477])	(6,605)	0	0			
図書館		面積	閲覧座席数	収 納 可 能 冊 数				大学全体		
		12,251㎡	1085	1106652						
体育館		面積	体育館以外のスポーツ施設の概要						大学全体	
		3,970㎡	水泳プール、テニスコート、武道場、弓道場ほか							
経費の見積り及び維持方法の概要	経費の見積り	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	国費による (運営費交付金)
		教員1人当り研究費等		-	-	-	-	-	-	
		共同研究費等		-	-	-	-	-	-	
		図書購入費	-	-	-	-	-	-	-	
	設備購入費	-	-	-	-	-	-	-		
	学生1人当り納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次			
	- 千円	- 千円	- 千円	- 千円	- 千円	- 千円	- 千円			
学生納付金以外の維持方法の概要										

大学等の名称	静岡大学							
	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地
	年	人	年次人	人		倍		
【学部】								
人文社会科学部		450	3年次5	1810		1.03		
社会学科	4	70	-	280	学士 (社会学又は学術)	1.02	昭和57	静岡県静岡市駿河区 大谷836番地
言語文化学科	4	75	-	300	学士 (文学又は学術)	1.04	平成4	同上
法学科	4	90	3年次2	364	学士 (法学又は学術)	1.02	昭和53	同上
法学科 (夜間主コース)	4	30	3年次3	126	学士 (法学)	1.01	平成8	同上
経済学科	4	155	-	620	学士 (経済学又は学術)	1.04	昭和53	同上
経済学科 (夜間主コース)	4	30	-	120	学士 (経済学)	1.02	平成8	同上
教育学部		300		1200		1.01		
学校教育教員養成課程	4	300	-	1200	学士 (教育学)	1.01	平成10	静岡県静岡市駿河区 大谷836番地
情報学部		245		980		1.04		
情報科学科	4	100	-	400	学士 (情報学)	1.04	平成8	静岡県浜松市中区 城北三丁目5番1号
行動情報学科	4	70	-	280	学士 (情報学)	1.03	平成28	同上
情報社会学科	4	75	-	300	学士 (情報学又は学術)	1.01	平成8	同上
理学部		240		960		1.01		
数学科	4	38	-	152	学士 (理学)	0.96	昭和40	静岡県静岡市駿河区 大谷836番地
物理学科	4	48	-	192	学士 (理学又は学術)	0.97	昭和40	同上
化学科	4	52	-	208	学士 (理学又は学術)	0.90	昭和40	同上
生物科学科	4	52	-	208	学士 (理学又は学術)	0.88	平成18	同上
地球科学科	4	50	-	200	学士 (理学又は学術)	0.95	平成18	同上

既設大学等の状況

	学 部 等 の 名 称	修業 年限	入学 定員	編入学 定 員	収容 定員	学位又 は称号	定 員 超過率	開設 年度	所 在 地	
既設 大学等 の状 況	工学部		550		2200		1.02			
	機械工学科	4	168	-	672	学士 (工学又は学術)	1.03	平成7	静岡県浜松市中区 城北三丁目5番1号	
	電気電子工学科	4	110	-	440	学士 (工学)	1.01	平成7	同上	
	電子物質科学科	4	110	-	440	学士 (工学)	1.00	平成25	同上	
	化学バイオ工学科	4	112	-	448	学士 (工学又は学術)	1.01	平成25	同上	
	数理システム工学科	4	50	-	200	学士 (工学)	1.05	平成25	同上	
	農学部		185	3年次 10	760		1.03			
	生物資源科学科	4	115	3年次 7	474	学士 (農学又は学術)	1.02	平成28	静岡県静岡市駿河区 大谷836番地	
	応用生命科学科	4	70	3年次 3	286	学士 (農学)	1.05	平成28	同上	
	環境森林科学科	4	-	-	-	学士 (農学)		平成18	同上	平成28年度より 学生募集停止
	【大学院】									
	人文社会科学研究科		36		72		1.09			
	臨床人間科学専攻	2	11	-	22	修士 (臨床人間科学)	1.09	平成15	静岡県静岡市駿河区 大谷836番地	
	比較地域文化専攻	2	10	-	20	修士 (文学)	1.25	平成9	同上	
	経済専攻	2	15	-	30	修士 (経済学)	0.99	平成17	同上	
	教育学研究科		49		102		0.98			
	共同教科開発学専攻	3	4	-	12	博士 (教育学)	1.25	平成24	静岡県静岡市駿河区 大谷836番地	
教育実践高度化専攻	2	45	-	90	教職修士 (専門職)	0.82	令和2	同上		

	学 部 等 の 名 称	修業 年限	入学 定員	編入学 定 員	収容 定員	学位又 は称号	定 員 超過率	開設 年度	所 在 地
既 設 大 学 等 の 状 況	情報学専攻	2	60	-	120	修士 (情報学)	1.31	平成27	静岡県浜松市中区 城北三丁目5番1号
	理学専攻	2	70	-	140	修士 (理学)	1.01	平成27	静岡県静岡市駿河区 大谷836番地
	工学専攻	2	322	-	644	修士 (工学)	1.05	平成27	静岡県浜松市中区 城北三丁目5番1号
	農学専攻	2	87	-	174	修士 (農学)	0.93	平成27	静岡県静岡市駿河区 大谷836番地
	光医工学研究科		5		15		0.86		
	光医工学共同専攻	3	5	-	15	博士 (光医工学)	0.86	平成30	静岡県浜松市中区 城北三丁目5番1号
	自然科学系教育部		45		135		1.04		
	ナノビジョン工学専攻	3	10	-	30	博士 (学術又は工学)	0.46	平成18	静岡県浜松市中区 城北三丁目5番1号
	光・ナノ物質機能専攻	3	9	-	27	博士 (学術、理学 又は工学)	0.92	平成18	同上
	情報科学専攻	3	11	-	33	博士 (学術、情報学、 理学又は工学)	1.24	平成18	同上
	環境・エネルギー システム専攻	3	7	-	21	博士 (学術、理学 又は工学)	1.47	平成18	静岡県静岡市駿河区 大谷836番地
バイオサイエンス専攻	3	8	-	24	博士 (学術、理学、 工学又は農学)	1.29	平成18	同上	

<p>附属施設の概要</p>	<p>(附属学校)</p> <p>名称：教育学部附属幼稚園 目的：義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして、幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長するとともに、次に掲げる任務を果たすことを目的とする。 ・教育学部における幼児の保育に関する研究に協力し、教育学部の計画に従い、学生の教育実習の実施に当たること ・保育の理論及び実際に関する研究並びにその実証を行うこと 所在地：静岡県静岡市葵区大岩町1番10号 設置年月：昭和26年4月改称 規模等：土地 5,987㎡，建物 1,020㎡</p> <p>名称：教育学部附属静岡小学校 目的：児童の心身の発達に応じて、義務教育として行われる普通教育のうち基礎的なものを施すとともに、次に掲げる任務を果たすことを目的とする。 ・教育学部における児童の教育に関する研究に協力し、教育学部の計画に従い、学生の教育実習の実施に当たること ・小学校教育の理論及び実際に関する研究並びにその実証を行うこと 所在地：静岡県静岡市葵区駿府町1番94号 設置年月：昭和26年4月改称 規模等：土地 14,223㎡，建物 7,136㎡</p> <p>名称：教育学部附属浜松小学校 目的：児童の心身の発達に応じて、義務教育として行われる普通教育のうち基礎的なものを施すとともに、次に掲げる任務を果たすことを目的とする。 ・教育学部における児童の教育に関する研究に協力し、教育学部の計画に従い、学生の教育実習の実施に当たること ・小学校教育の理論及び実際に関する研究並びにその実証を行うこと 所在地：静岡県浜松市中区布橋3丁目2番1号 設置年月：昭和26年4月改称 規模等：土地 24,170㎡，建物 4,614㎡</p> <p>名称：教育学部附属静岡中学校 目的：小学校における教育の基礎の上に、心身の発達に応じて、義務教育として行われる普通教育を施すとともに、次に掲げる任務を果たすことを目的とする。 ・教育学部における生徒の教育に関する研究に協力し、教育学部の計画に従い、学生の教育実習の実施に当たること ・中学校教育の理論的、実証的研究を行うとともに、他の学校との教育研究の協力及び教育研究の成果の交流を行うこと 所在地：静岡県静岡市葵区駿府町1番86号 設置年月：昭和26年4月改称 規模等：土地 18,127㎡，建物 6,293㎡</p> <p>名称：教育学部附属浜松中学校 目的：小学校における教育の基礎の上に、心身の発達に応じて、義務教育として行われる普通教育を施すとともに、次に掲げる任務を果たすことを目的とする。 ・教育学部における生徒の教育に関する研究に協力し、教育学部の計画に従い、学生の教育実習の実施に当たること ・中学校教育の理論的、実証的研究を行うとともに、他の学校との教育研究の協力及び教育研究の成果の交流を行うこと 所在地：静岡県浜松市中区布橋3丁目2番2号 設置年月：昭和26年4月改称 規模等：土地 25,884㎡，建物 5,667㎡</p> <p>名称：教育学部附属島田中学校 目的：小学校における教育の基礎の上に、心身の発達に応じて、義務教育として行われる普通教育を施すとともに、次に掲げる任務を果たすことを目的とする。 ・教育学部における生徒の教育に関する研究に協力し、教育学部の計画に従い、学生の教育実習の実施に当たること ・中学校教育の理論的、実証的研究を行うとともに、他の学校との教育研究の協力及び教育研究の成果の交流を行うこと 所在地：静岡県島田市中河町169 設置年月：昭和26年4月改称 規模等：土地 23,214㎡，建物 5,285㎡</p>	
----------------	--	--

<p>附属施設の概要</p>	<p>名称：教育学部附属特別支援学校 目的：知的障害者に対して、小学校、中学校又は高等学校に準ずる教育を施し、障害による学習上又は生活上の困難を克服し自立を図るために必要な知識技能を授けるとともに、次に掲げる任務を有する。 ・知的障害者教育の理論及び実際に関する研究を行い教育界の参考に供する。 ・学生の教育実習及び介護等体験を指導する。 所在地：静岡県静岡市葵区大岩町1番15号 設置年月：昭和49年4月（平成19年4月改称） 規模等：土地 22,314㎡、建物 3,732㎡</p> <p>(農場、演習林)</p>	
	<p>名称：農学部附属地域フィールド科学教育研究センター 目的：持続型農林業の確立及び森林・水圏環境の保全についてのフィールド科学に関する教育研究を行うとともに、地域社会の発展及び国際社会に貢献することを目的とする。 所在地：(持続型農業生態系部門藤枝フィールド) 静岡県藤枝市仮宿63 (森林生態系部門天竜フィールド(上阿多古)) 静岡県浜松市天竜区西藤平1623の1 (森林生態系部門南アルプスフィールド(中川根)) 静岡県榛原郡川根本町元藤川298の7 (水圏生態系部門用宗フィールド) 静岡県静岡市駿河区用宗2丁目28 設置年月：平成14年4月 規模等：(持続型農業生態系部門藤枝フィールド) 土地 137,263㎡、建物 4,239㎡ (森林生態系部門天竜フィールド(上阿多古)) 土地 608,776㎡、建物 638㎡ (森林生態系部門南アルプスフィールド(中川根)) 土地 2,592,890㎡、建物 307㎡ (水圏生態系部門用宗フィールド) 土地 3,346㎡、建物 479㎡</p> <p>(その他)</p>	
	<p>名称：工学部次世代ものづくり人材育成センター 目的：独創性に富んだ科学技術を創造する人材養成のための教育、創造的な基盤研究・研究開発、社会に開かれた「知」の拠点とした社会地域連携を行うことを目的とする。 所在地：静岡県浜松市中区城北3-5-1 設置年月：平成22年4月 規模等：建物 2,887㎡</p>	
	<p>名称：電子工学研究所 目的：電子工学に関する学理及びその応用の研究を行うこと並びに大学の教員その他の者で研究所の目的たる研究と同一の分野の研究に従事する者に利用させることを目的とする。 所在地：静岡県浜松市中区城北3-5-1 設置年月：昭和40年4月 規模等：土地 9,608㎡、建物 4,162㎡</p> <p>名称：グリーン科学技術研究所 目的：グリーン科学に関する学理及びその応用の研究を行うこと、大学の教員その他の者で研究所の目的たる研究と同一の分野の研究に従事する者の共同利用に供すること並びに学内における教育・研究のための共同利用を支援することを目的とする。 所在地：静岡県静岡市駿河区大谷836、静岡県浜松市中区城北3-5-1 設置年月：平成25年4月 規模等：建物 大谷総合研究棟(5,658㎡)及び城北総合研究棟(9,408㎡)の一部を使用</p>	

<p>附属施設の概要</p>	<p>名称：大学教育センター 目的：教養教育と学部専門教育の有機的連携を図り、授業内容・方法及び教育組織に対する不断の点検・改善を行うこと並びに教養教育を効果的かつ円滑に実施することを目的とする。 所在地：静岡県静岡市駿河区大谷836 設置年月：平成16年4月 規模等：建物 共通教育A棟（6,346㎡）の一部を使用</p>	
	<p>名称：学生支援センター 目的：全学的立場からキャリアサポート、学生相談、学生生活支援及び障がい学生支援の企画・実施を行い、もって本学の学生支援活動の充実発展に寄与することを目的とする。 所在地：静岡県静岡市駿河区大谷836 設置年月：平成22年12月 規模等：建物 共通教育A棟（6,346㎡）の一部を使用</p>	
	<p>名称：全学入試センター 目的：静岡大学の入学者選抜に関する企画、広報及びデータ分析等を専門的に調査研究し、各部署で実施する入学試験を専門的立場から支援し、静岡大学における円滑な入学者選抜の実施に寄与することを目的とする。 所在地：静岡県静岡市駿河区大谷836 設置年月：平成16年4月 規模等：建物 共通教育A棟（6,346㎡）の一部を使用</p>	
	<p>名称：情報基盤センター 目的：静岡大学の情報戦略に基づき、全学情報基盤システムの研究開発及び運用支援を一元的に行うことを目的とする。 所在地：静岡県浜松市中区城北3-5-1，静岡県静岡市駿河区大谷836 設置年月：平成21年4月 規模等：建物 工学部7号館（3,270㎡）、創造科学技術大学院棟（2,412㎡）及び共通教育L棟（5,012㎡）の一部を使用</p>	
	<p>名称：防災総合センター 目的：静岡大学における防災教育及び防災科学研究を総合的に展開させるとともに、地域と連携して地域の防災体制の向上に資することを目的とする。 所在地：静岡県静岡市駿河区大谷836 設置年月：平成20年4月 規模等：建物 大学会館（2,452㎡）の一部を使用</p>	
	<p>名称：浜松キャンパス共同利用機器センター 目的：静岡大学の学内共同教育研究施設として、各種大型評価・分析機器等を利用する教育、研究及び企業等からの試験委託の用に供するとともに、関連技術の研究・開発等を行い、もって本学の教育研究の進展及び産学連携活動の推進に資することを目的とする。 所在地：静岡県浜松市中区城北3-5-1 設置年月：平成22年4月 規模等：建物 城北総合研究棟（9,408㎡）の一部を使用</p>	
<p>名称：教職センター 目的：静岡大学における教員養成等カリキュラムの管理・運営体制の整備を行い、組織的指導体制を確立することを目的とする。 所在地：静岡県静岡市駿河区大谷836 設置年月：平成27年4月 規模等：建物 共通教育A棟（6,346㎡）の一部を使用</p>		

<p>附属施設の概要</p>	<p>名称：地域創造教育センター 目的：静岡大学において地域社会との教育連携の中核的役割を担い、地域志向を持った人材を育成するとともに、教育研究を通じて地域社会が抱える課題解決に寄与することにより、地域社会の発展に貢献することを目的とする。 所在地：静岡県静岡市駿河区大谷836 設置年月：平成29年10月 規模等：建物 共通教育A棟（6,346㎡）の一部を使用</p>	
	<p>名称：サステナビリティセンター 目的：地域社会や国際社会におけるステークホルダーと共に、学際的な教育研究をはじめとした多様な取組を推進することにより、持続可能な開発目標（SDGs）の達成に資することを目的とする。 所在地：静岡県静岡市駿河区大谷836 設置年月：令和2年4月 規模等：建物 共通教育A棟（6,346㎡）の一部を使用</p>	
	<p>名称：イノベーション社会連携推進機構 目的：静岡大学における産学連携と地域連携に関わる戦略を全学的かつ一体的な観点から確立し、静岡大学の教育研究成果を社会に積極的に還元し社会連携を推進することにより、地域等の発展に資することを目的とする。 所在地：静岡県浜松市中区城北3-5-1 設置年月：平成24年4月 規模等：建物 2,627㎡</p>	
	<p>名称：全学教育基盤機構 目的：静岡大学における教育、学生支援及び入学者選抜（以下「教育等」という。）に関する基本方針及び主要施策その他教育等に関する事項について、全学的な観点から検討し、その結果に基づき、本学の教育等の質の向上及び一層の推進を図ることを目的とする。 所在地：静岡県静岡市駿河区大谷836 設置年月：平成27年4月 規模等：－</p>	
	<p>名称：国際連携推進機構 目的：静岡大学における国際連携に関わる戦略を全学的な観点から検討し、静岡大学の理念及び基本方針に沿った総合的かつ効果的な国際連携の一層の推進を図ることを目的とする。 所在地：静岡県静岡市駿河区大谷836，静岡県浜松市中区城北3-5-1 設置年月：平成29年10月 規模等：建物 共通教育A棟（6,346㎡）及び工学部7号館（3,270㎡）の一部を使用</p>	
<p>名称：未来社会デザイン機構 目的：静岡大学における持続可能な開発目標（SDGs）の達成に向け、地域に住む人々のウェルビーイング及び持続可能な社会構築並びに分野横断的な教育研究の発展を、新たな社会的価値の創造及び未来社会のデザインに基づき、大学の有する学術的資産の集約的投資及び産官学民の共創により実現することを目的とする。 所在地：静岡県静岡市駿河区大谷836 設置年月：令和2年4月 規模等：建物 共通教育A棟（6,346㎡）の一部を使用及び東部サテライトの一部を使用</p>		

教育課程等の概要															
(グローバル共創科学部グローバル共創科学科)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
教養科目	教養基礎科目	新入生セミナー	1前	2				○			3				共同
		数理・データサイエンス入門	1前	1				○							兼1
		情報処理・データサイエンス演習	1前	2				○		1					
		英語コミュニケーション	1前	2				○							兼15 共同
		英語演習	2後	1				○							兼3 共同
		基礎英語A	1前		1			○							兼6 共同
		基礎英語B	1後		1			○							兼7 共同
		基礎英語C	2前		1			○							兼3 共同
		中級英語A	1前		2			○							兼1 共同
		中級英語B	1後		2			○							兼3 共同
		中級英語C	2前		2			○							兼2 共同
		中級英語D	2後		2			○							兼1 共同
		上級英語A	1前		2			○							兼3 共同
		上級英語B	1後		2			○							兼1 共同
		上級英語C	2前		2			○							兼1 共同
		上級英語D	2後		2			○							兼1 共同
		英語インテンシブA	1前		2			○							兼1 隔年・集中
		英語インテンシブB	1後		2			○							兼1 隔年・集中
		英語インテンシブC	1前		2			○							兼1 隔年・集中
		英語インテンシブD	1後		2			○							兼1 隔年・集中
		総合英語I A	1後		2			○							兼3 共同
		総合英語I B	2前		2			○							兼1 共同
		総合英語I C	2後		2			○							兼1 共同
		総合英語II A	1後		2			○							兼2 共同
		総合英語II B	2前		2			○							兼1 共同
		総合英語II C	2後		2			○							兼1 共同
		総合英語III	3前		2			○							兼1 共同
		ESP I (留学)	1前		2			○							兼2 共同
		ESP II (地域)	1後		2			○							兼1 共同
		アカデミックイングリッシュ	2後		2			○			1				
		ビジネスイングリッシュ	3後		2			○							兼1 共同
		英語海外研修A	1前		2			○							兼3 共同
		英語海外研修B	1前		2			○							兼2 共同
		スポーツI	2前		1				○		1	1			兼4 共同
		スポーツII	2後		1				○		1				兼4 共同
		健康体育実技I	1前		1				○		1				兼3 共同
		健康体育実技II	1後		1				○		1				兼3 共同
		健康体育演習	1前		1				○						兼3 共同
		キャリアデザイン	1前		1			○			1				兼3 オムニバス共同(一部)
	小計(39科目)	—		9	58	0		—		4	4	1	0	0	兼48
教養展開科目	哲学	2前			2			○							兼1 共同
	歴史と文化	1後			2			○							兼1 共同
	ことばと表現	2前			2			○							兼1 共同
	日本国憲法	1後			2			○		2					共同
	法と社会	2前			2			○		2					オムニバス
	経済と社会	2前			2			○							兼1 共同
	現代の社会	1後			2			○			1				兼5 オムニバス
	心理学	2前			2			○			1				

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
教養科目	教養展開科目	地域と文化	2前		2		○									兼1	
		芸術論	2前		2		○									兼1	
		世界のことばと文化	1後		2		○									兼1	
		数学の世界	1後		2		○									兼1	
		数理の構造	2前		2		○									兼1	
		自然と物理	2前		2		○									兼1	
		化学の世界	2前		2		○									兼2 共同	
		生物と環境	2前		2		○									兼3 共同	
		地球科学	1後		2		○									兼2 オムニバス	
		科学と技術	2前		2		○				1					兼7 オムニバス	
		小計(18科目)		—	0	36	0	—			4	3	0	0	0	兼29	
留學生科目	日本語科目	日本語Ⅰ	1前		2		○									兼1	
		日本語Ⅱ	1前		2		○									兼1	
		日本語Ⅲ	1後		2		○									兼1	
		日本語Ⅳ	1後		2		○									兼1	
		日本語Ⅴ	2前		2		○									兼1	
		日本語Ⅵ	2後		2		○									兼1	
		日本事情	2後		2		○									兼1	
小計(7科目)		—	0	14	0	—			0	0	0	0	0	兼5			
学部共通科目	グローバル系科目	Oral Communication I	1後		2		○			2						兼2 共同	
		Oral Communication II	2前		2		○			2						兼2 共同	
		Reading & Discussion I	2後		2		○			2						兼2 共同	
		Reading & Discussion II	3前		2		○			2						兼2 共同	
		English Writing	3後		2		○			2						兼2 共同	
		English Presentation	3後		2		○			2						兼2 共同	
		English Global Studies	3後		2		○			2						兼2 共同	
		コラボラティブ・アプローチ基礎演習	1後	2			○						2			兼2 共同	
		海外研修プログラムⅠ	1・2前・後		2				○								兼2 共同集中
		海外研修プログラムⅡ	3前・後		2				○								兼2 共同集中
		コラボラティブ・ワークスⅠ	2前		1				○				2				兼2 共同
		コラボラティブ・ワークスⅡ	2後		1				○				2				兼2 共同
		コラボラティブ・ワークスⅢ	3前		1				○				2				兼2 共同
		コラボラティブ・ワークスⅣ	3後		1				○				2				兼2 共同
		コミュニティサービスラーニング	2後		1				○								兼1 集中
		ファシリテーション概論	1後		1			○									兼1 集中
		アートラボ	2後		1				○		1		1				オムニバス 共同(一部)
小計(17科目)		—	10	17	0	—			3	0	1	2	0	兼7			
データサイエンス系科目	基礎数学	基礎数学	1前		2		○										
		データサイエンス基礎	1後		1		○				1						
		データサイエンス演習	1後		1			○			1						
		データエンジニアリング基礎	2前		2		○				1						
		AI基礎	2後		1		○				1						
		プログラミング演習Ⅰ	2後		1			○								兼1	
		AI演習	3前		1			○			1						
		プログラミング演習Ⅱ	3前		1			○								兼1	
		共創科学調査法	2前	2				○					1			兼1 オムニバス	
共創科学実験法(人間科学)	2後		1			○			2					兼1 オムニバス			
共創科学実験法(自然科学)	2後		1			○					1						
小計(11科目)		—	10	4	0	—			0	4	1	1	0	兼3			

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
学部共通科目	共創科学系科目	総合人間科学概論	1前	2			○			4	1					オムニバス
		バイオエコノミー概論	1前	2			○			4	2	1	1		兼2	オムニバス
		国際地域社会とダイバーシティ	1前	2			○			3	3	1	1		兼1	オムニバス
		コミュニティ基礎論	1前	2			○			2	2	1	1			オムニバス
		アートシンキング・デザインシンキング	1前	2			○					1			兼1	オムニバス
		小計(5科目)	—	10	0	0				9	5	3	2	0	兼4	
	人文・社会科学系科目	国際地域共生概論A(静岡・日本)	1後	2			○			2	3	1				オムニバス
		人間の尊厳と人権	1後	2			○			3						オムニバス 共同(一部)
		現代社会の認知科学	1後	2			○				2				兼1	オムニバス
		応用倫理学概論	2前		2		○			1						
		マネジメント論	2後		1		○								兼1	
		国際地域共生概論B(アジア・オセアニア)	2前		2		○			1			1			オムニバス
		政治と社会	2後		1		○								兼1	
		多文化共生論	2前		2		○								兼1	
		地球環境問題と法	2後		2		○			1						
臨床心理学概論		2後		2		○			1							
スポーツ文化論		2前		2		○				1	1				オムニバス 共同(一部)	
国際地域共生概論C(欧米)		2後		2		○								兼1		
安全とリスクの心理学		2後		2		○								兼2	オムニバス	
現代マーケティング論	2後		1		○								兼1			
アート・デザインコミュニケーション	2前		2		○						1		兼1	オムニバス		
	小計(15科目)	—	6	21	0				5	4	2	1	0	兼8		
自然科学系科目	暮らしの科学	1後	2			○			1					兼1	オムニバス 共同(一部)	
	スポーツ・健康科学	1後	2			○			1	1					オムニバス 共同(一部)	
	人体の構造と機能	2前		2		○				1						
	カーボンニュートラル科学	2後		2		○			3	1				兼1	オムニバス	
	防災・減災論	2後		2		○			1					兼1	オムニバス 共同(一部)	
	生物多様性保全論	2後		2		○					1			兼1	オムニバス	
	遺伝資源・知的所有権論	2後		2		○								兼2	オムニバス	
	都市計画論	2後		2		○				1						
	基礎生物学	2前		2		○					1		1			
	基礎化学	2前		2		○				1						
	基礎物理学	2前		2		○		※						兼1	実験	
	基礎地学	2前		2		○								兼1		
	小計(12科目)	—	4	20	0				5	4	1	0	0	兼6		
コース専門科目	国際地域共生学研究Ⅰ	3前		2			○		4	1	1	2			共同	
	国際地域共生学研究Ⅱ	3後		2			○		4	1	1	2			共同	
	国際地域共生学演習Ⅰ	4前		2			○		4	1	1	2			共同	
	国際地域共生学演習Ⅱ	4後		2			○		4	1	1	2			共同	
	グローバル協力論	3後		2		○			1							
	国際移動論	3前		2		○								兼1		
	エスニシティ論	3後		2		○						1				
	観光振興論	3後		2		○								兼2	共同	
	比較文化から見る法	3前		1		○			1							
	国際・地域の安全と法	3後		1		○			2						オムニバス 共同(一部)	
	社会的排除とソーシャルインクルージョン	3前		2		○								兼1	隔年	
	国際地域ケーススタディ	3後		1			○		4	1	1	2		兼1	共同	
	国際福祉社会論	3後		2		○						1				
住居計画	3前		2		○				1							
防災まちづくり	3前		2		○			1								

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
コース専門科目	国際地域共生学	3前		1			○								兼1		
	表象・メディア・文化	3後		2			○								兼1		
	視覚芸術論	3後		2			○				1						
	芸術と教育	3前		2			○								兼1		
	ミュージアム・スタディーズ	3前		2			○					1					
	小計(20科目)	—	0	36	0		—		6	1	1	2	0		兼8		
	生命圏循環共生学	生命圏循環共生学研究Ⅰ	3前		2			○		4	5	1					共同
		生命圏循環共生学研究Ⅱ	3後		2			○		4	5	1					共同
		生命圏循環共生学演習Ⅰ	4前		2			○		4	5	1					共同
		生命圏循環共生学演習Ⅱ	4後		2			○		4	5	1					共同
		環境再生科学	3前		2			○		1							
		安全管理	3後		2			○								兼1	
		資源循環化学	3前		2			○			1						
		材料科学	3前		2			○		1	1						オムニバス
		環境共生社会論	3前		2			○			1						
		自然災害の現象	3後		2			○								兼1	
		森林水文学	3後		2			○								兼2	オムニバス
		環境と経済	3前		2			○		1							
		遺伝と進化	3前		2			○			1						
		分析化学	3前		2			○			1						
農村・森林の環境と法		3前		2			○		1								
環境工学		3前		2			○								兼1		
バイオテクノロジー		3前		2			○								兼1		
技術者倫理		3後		1			○								兼1		
環境微生物学		3後		2			○								兼2	オムニバス	
小計(19科目)	—	0	37	0		—		4	5	1	0	0		兼8			
総合人間科学	総合人間科学研究Ⅰ	3前		2			○		5	3	1					共同	
	総合人間科学研究Ⅱ	3後		2			○		5	3	1					共同	
	総合人間科学演習Ⅰ	4前		2			○		5	3	1					共同	
	総合人間科学演習Ⅱ	4後		2			○		5	3	1					共同	
	発達心理学	3前		2			○								兼1		
	知覚・認知心理学	3前		1			○			1							
	デザイン心理学	3前		1			○			1							
	社会・集団・家族心理学	3後		2			○								兼1		
	身体・認知情報システム論	3後		2			○								兼1		
	情報通信技術論	3前		1			○								兼1		
	情報通信技術演習	3前		1			○								兼1		
	健康・医療心理学	3後		1			○		1								
	コミュニティ心理学	3後		1			○		1								
	運動生理学	3前		2			○		1								
	身体機能のメカニズムと計測	3後		2			○			1							
	スポーツ経営学	3前		2			○			1							
	スポーツ心理学	3後		2			○								兼1		
	コーチング学	3前		2			○					1					
	スポーツの理論と実践Ⅰ	3前		1					1	2	1					オムニバス 共同(一部)	
	スポーツの理論と実践Ⅱ	3後		1					1	2	1					オムニバス 共同(一部)	
	人間科学の課題と法	3後		1			○		1								
	人間行動科学と刑事政策	3後		1			○		1								
	ウェルビーイングの哲学	3前		1			○		1								
	生命・医療倫理学	3前		1			○		1								
小計(24科目)	—	0	36	0		—		5	3	1	0	0		兼5			

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
学部共通科目	グローバル共創科学卒業研究	4通	6				○		13	9	3	2		共同	
	小計(1科目)	—	6	0	0		—		13	9	3	2	0	兼0	
合計(188科目)		—	55	279	0		—		13	9	3	2	0	兼102	—
学位又は称号	学士(学術)	学位又は学科の分野			文学関係、法学関係、社会学・社会福祉学関係、農学関係										
卒業要件及び履修方法						授業期間等									
必修科目55単位、選択科目69単位(うち教養科目から11単位以上、グローバル系科目から6単位以上、データサイエンス系科目から2単位以上、人文・社会科学系科目から8単位以上、自然科学系科目から8単位以上、コース専門科目から26単位以上)の計124単位以上を修得すること。なお、教養科目の選択科目11単位のうち、教養展開科目から4単位、また、コース専門科目の選択科目26単位のうち、3年時から選択するコースに応じた研究Ⅰ・Ⅱ、演習Ⅰ・Ⅱの4科目計8単位を選択必修とする。						1学年の学期区分			2学期						
						1学期の授業期間			15週						
						1時限の授業時間			90分						

授 業 科 目 の 概 要				
(グローバル共創科学部グローバル共創科学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
教養科目	教養基礎科目	新入生セミナー	大学のシステムや大学での学び方について理解し、研究に必要な基礎的な方法を身につけるとともに、充実した大学生活を送るにあたっての基本的な事柄や社会マナーを知ること为目标とする。大学での勉学・研究に必要な調査の方法、レポートの書き方などの実践的な事柄について、それぞれの担当者の経験に基づく講義により、高校までの授業と大学での授業の違いについて理解させる。コース決めに関するガイダンスや講義内容を通して、学修テーマを考えさせ、4年間の計画の見直しを持たせる。	共同
		数理・データサイエンス入門	数理・データサイエンスの基本的考え方、統計学の基礎、情報技術の基礎的知識を理解し、今後の学習で数理・データサイエンスを活用した学習ができるようになることを目標とする。数理・データサイエンスの活用事例、統計学基礎、情報技術基礎、情報倫理基礎に関する講義を通じて、具体的な社会課題における数理・データサイエンスの具体的な事例を学ぶとともに、数理・データサイエンスの必要性について理解し、将来社会で数理・データサイエンスを活用することの必要性を説明できるようになることを目指す。	
		情報処理・データサイエンス演習	本授業はデータサイエンス、教養教育の観点から、「情報」を扱うため知識・スキルを獲得するとともに、大学の専門教育の数理・データサイエンス・AI教育の学習で求められるデータ処理に必要な知識・スキルを獲得することを目指す。具体的には、(1) 高校生までに学んできた情報機器の利用のスキルを前提に、大学での専門教育で求められる高度な情報機器を活用した情報処理ができるようになること、(2) 数理・データサイエンス・AI教育の観点からエビデンスベースのレポートスキル、データ処理とデータの可視化について今後の専門教育での学修に必要な知識とスキルの獲得を目標とする。	
		英語コミュニケーション	基本的なコミュニケーション(あいさつ・要求・助言など)を取るためのスピーキング能力やコミュニケーション・ストラテジーを身につけることを目標とする。ペアワークやグループワークにより、スピーキングを中心としたコミュニケーション活動を行うとともに、英語力に関する客観的な指標の1つとして、TOEIC® Listening & Reading テストを受験し、学生が自身の英語力について把握しながら、日常生活及び自身の経験や考えについて話すことができる能力を伸ばすことを目指す。	共同
		英語演習	4技能(リーディング・リスニング・スピーキング・ライティング)のうち、特にリーディングとリスニングに重点を置き、大学生として必要となる英語力の基盤を養うことを目標とする。TOEICについての対策や演習を行う。リスニングとリーディングを中心に、基礎的な文法力や語彙力を充実させる。授業を通じてTOEICの出題形式に慣れさせ、英語力の客観的な指標として、TOEICで500点以上を取得できる能力を身に付けさせる。	共同
		基礎英語A	4技能(リーディング・リスニング・スピーキング・ライティング)のうち、特にリーディングとリスニングに重点を置き、大学生として必要となる基礎的な英語力を身に付けることを目標とする。比較的易しい英文で書かれた英字新聞の記事を題材に、語彙の学習や速読、リスニングの演習を行う他、ペアやグループで問題を出し合うグループワークも取り入れた授業を予定している。その他、英語でのスピーチやエッセイの作成等、英語による自己表現についても指導する。期末にはTOEICを受験し、各自の英語力の確認を行う。	共同
		基礎英語B	4技能(リーディング・リスニング・スピーキング・ライティング)のうち、特にリーディングとリスニングに重点を置き、大学生として必要となる基礎的な英語力を身に付けることを目標とする。具体的には、1. 歴史上有名な演説を題材に読解を行い、リーディング能力を伸ばす、2. 文章の構成法を理解し、リーディング能力を伸ばす、3. これまで学習した文法事項を確認しながら、文の構造をきちんと理解する、4. 演説における音声を確認し、音を伴いながら、語彙や表現を増やす、といった指導を進めながら、その都度関連した表現や文法構造、文化などを含む歌を適宜導入して、英語への理解を深めさせる。	共同
		基礎英語C	4技能(リーディング・リスニング・スピーキング・ライティング)のうち、特にリーディングとリスニングに重点を置き、これまでの学習で培った知識や能力を土台として、大学生として必要となる基礎的な英語力を身に付けることを目標とする。NHKの英語ニュースを扱ったテキストを使用しながら、動画の活用により自然な速さの英語に触れ、リスニング力や表現力を磨くことを目指すとともに、TOEIC L&Rの形式に沿った問題に取り組み、総合的な英語力を身に付けさせる。	共同
		中級英語A	4技能(リーディング・リスニング・スピーキング・ライティング)のうち、特にリーディングとリスニングに重点を置き、これまでの学習で身につけた知識や能力を土台に、大学生として必要となる英語力の基盤として、速読力や語彙力を向上、発展させることを目標とする。主としてリスニングとリーディングにおいて、注意点を踏まえながら問題形式のエクササイズを行い、短めのスピーキングによるアウトプットに繋げる。講義の中で、英語圏の国のそれぞれの文化、社会、歴史等を扱うことで、それに興味を持ち、知見を深める契機とする。授業は2回を1チャプターとし、チャプターが終了した次の回で、前チャプターの単語テストを行うとともに、不定期に小テストを行う。	
		中級英語B	4技能(リーディング・リスニング・スピーキング・ライティング)のうち、特にリスニングとスピーキングに重点を置き、これまでの学習で身につけた知識や能力を土台に、大学生として必要となる英語力の基盤として、様々な現代的課題について英語で理解し考えることができる能力の修得を目標とする。ペアワークやグループワークによるコミュニケーション活動を行いながら、英文読解を通して、現代人および現代社会が抱える心的問題について多面的な視点から論じる。演習を通じてオーセンティックな英語の発音や表現に触れ、内容理解のための方略などについて学ばせる。また、英語でプレゼンテーションを行い発音やスピーキングのスキルを身に付けさせる。	共同
中級英語C	4技能(リーディング・リスニング・スピーキング・ライティング)のうち、特にリーディングとライティングに重点を置き、これまでの学習で身につけた知識や能力を土台に、大学生として必要となる英語力の基盤を築くことを目標とする。具体的には、形容詞・形容動詞・接続詞・前置詞句・名詞句などの品詞や句の解説・練習を行ったうえで、文章の連結等の発展的な内容を理解させる。	共同		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目 教養基礎科目	中級英語D	高度な英文の講読により、英語の読解力、音読、ライティングの向上と知的思考力を養成することを目標とする。テキストの精読をとおして、古代から現代にいたるヨーロッパの文化についての理解を深める。毎回、音読を課すことで、学生のテキストの理解をより深めるとともに、発音の指導も行う。	
	上級英語A	これまでの学習で身につけた知識や能力を土台に、さらなる高度な英語力を身に付けることを目標とする。ペアやグループの形式によるディスカッションのほか、多様な興味深いトピックを用いたディベートも行う。パズル・クイズ形式を用いた語彙と文法の学習等、様々な方法を活用し、総合的な英語力を育てる。	共同
	上級英語B	4技能(リーディング・リスニング・スピーキング・ライティング)のうち、特にリーディング(とスピーキング)に重点を置き、これまでの学習で身につけた知識や能力を土台に、さらなる高度な英語力を身に付けることを目標とする。主にBBCのOne-minute World Newsを教材とし、その日のニュースでどのようなことが話題になっているのか把握することができるようになるには何が必要であるかを考え、それを獲得するための練習を行う。そうした能力を身に付けた後は、専門の学習や将来の仕事に活かしていくための指導を行う。	
	上級英語C	英国の美術史研究者の著した、西洋の代表的な絵画についての高度で洗練された文章を読むことで、読解力を高めることを目標とする。歴史画、神話画、宗教画といった様々なジャンルの西洋絵画を鑑賞する方法を英語で学ぶ。長文の読解、聴解の能力を高めるために高度な内容のテキストにも挑戦させるとともに、ライティングの課題も課す。	
	上級英語D	4技能(リーディング・リスニング・スピーキング・ライティング)のうち、特にリーディングとライティングに重点を置き、これまでの学習で身につけた知識や能力を土台に、さらなる高度な英語力を身に付けることを目標とする。受講生に対し、授業内はもちろん授業外の時間も活用して、複数のレポートの作成を課す。本講義の最終段階では、英文での物語を書かせる。	
	英語インテンシブA	留学に必要な基本的な英語のスキル(英語でのプレゼンテーションやレポート作成)を身に付けさせるとともに、実際に留学した際に、現地の語学学校での英語の学習についていける英語力を持たせることを目標とする。語学留学を視野に入れて、留学先の語学学校(現地の大学附属の語学学校を想定)で学ぶことが予想される基礎的なアカデミック英語(英語のプレゼンテーションやレポートの書き方など)を教授した上で、個人またはグループで選択したテーマについて、英語で調査して、プレゼンテーションやレポートを作成し、英語で発表させる。	隔年・集中
	英語インテンシブB	英語の正しい発音や音のつながり、短縮といった法則を学ぶことで、リスニング力を向上することを目標とする。CDや動画などの音源を用いてネイティブ・スピーカーの発音を聞き、舌や唇の使い方の図解を見つつ発音練習を行う。通常の教科書CD音声とは異なり、単語をつなげて発音する自然な英語発話における音の法則について教授する。	隔年・集中
	英語インテンシブC	留学に必要な基本的な英語のスキル(英語でのプレゼンテーションやレポート作成)を身に付けさせるとともに、実際に留学した際に、現地の語学学校での英語の学習についていける英語力を持たせることを目標とする。語学留学を視野に入れて、留学先の語学学校(現地の大学附属の語学学校を想定)で学ぶことが予想される基礎的なアカデミック英語(英語のプレゼンテーションやレポートの書き方など)を教授した上で、個人またはグループで選択したテーマについて、英語で調査して、プレゼンテーションやレポートを作成し、英語で発表させる。	隔年・集中
	英語インテンシブD	英語の正しい発音や音のつながり、短縮といった法則を学ぶことで、リスニング力を向上することを目標とする。CDや動画などの音源を用いてネイティブ・スピーカーの発音を聞き、舌や唇の使い方の図解を見つつ発音練習を行う。通常の教科書CD音声とは異なり、単語をつなげて発音する自然な英語発話における音の法則について教授する。	隔年・集中
	総合英語I A	これまでの学習で身につけた知識や能力を土台に、総合的な英語運用能力をつけ、コミュニケーション能力を伸ばすことで、基本的なコミュニケーションタスクを実行できるようになることを目標とする。アメリカの放送局であるCNNで放送されているテーマをいくつかピックアップしたものを聞くことで、英語のスピードに慣れることと、アメリカの報道視点を把握した上で、受講生の考えに基づいて議論する他、自由なテーマでの英語のスピーチや英文記事の収集を行い、それへのコメント等を行う。	共同
	総合英語I B	これまでの学習で身につけた知識や能力を土台に、総合的な英語運用能力をつけ、学生が既に修得している英語力を高めて自然な英会話を運用することができるようにすることを目標とする。本授業では、学生の積極的な発言を最優先に考える。	
	総合英語I C	これまでの学習で身につけた知識や能力を土台に、総合的な英語運用能力をつけ、効果的な活動を通じて、英語運用における流暢さを構築することを目標とする。	
	総合英語II A	これまでの学習で身につけた知識や能力を土台に、総合的な英語運用能力を身に付けることを目標とする。授業では、時事英語に関する単語の確認を行った後、学生の予習課題の確認を行う。取り扱った時事の内容を英問英答形式で確認し、内容に即した英語でのトーク、シャドーイングやその背景の分析を行う。必要に応じてTIMEの記事も取り扱う。	共同
	総合英語II B	これまでの学習で身につけた知識や能力を土台に、総合的な英語運用能力を身に付けることを目標とする。授業では、主にパネルディスカッションについて、社会問題や環境問題などの中からテーマを選び、問題点を具体的に調べ、その問題を解決するにはどうしたら良いのかを各グループで考えて、英語で発表する。	
	総合英語II C	これまでの学習で身につけた知識や能力を土台に、総合的な英語運用能力を身に付けることを目標とする。授業では、主に英語によるディベートスキルについて、環境保護に関する活動や社会政策などの中からテーマを選び、グループ内で賛成派と反対派に別れて、理論的にきちんと証拠を提示しながら、英語で意見をぶつけ合うスキルを学ぶ。	
	総合英語III	これまでの学習で身につけた知識や能力を土台に、総合的な英語運用能力を身に付けることを目標とする。授業では、小説「柳の風」を読解し、その内容とテーマについて話し合う。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目 教養基礎科目	ESP I (留学)	これまでの学習で身につけた知識や能力を土台に、留学に必要な知識と英語力を身に付けることを目標とする。前半は留学に関する知識を学びながら、基礎的な英語のPPTを使ったプレゼンテーションスキルを学ぶ。後半は、前半の知識を応用しつつ、各自（または小グループで）興味のある国（留学を考えている国）を選び、その国の教育事情や文化など、いくつかのサブトピックを考えて英語で調査する。学期末には、その成果をポスター発表にまとめて英語で発信する。	共同
	ESP II (地域)	これまでの学習で身につけた知識や能力を土台に、総合的な英語運用能力を身に付けることを目標とする。前半は静岡の食・観光・産業・自然・歴史等を英語で調べ、外国人観光客が静岡を観光する際に期待される事等を含めて英語で調査する。後半は、前半の調査で得た情報を活用し、今後、静岡への外国人観光客を増やすために、静岡の魅力と静岡が外国人観光客にできる事等を、英語で世界に発信する。前半・後半ともにグループで作業をする。	
	アカデミックイングリッシュ	英語でのプレゼンテーションを行う際に自信を持たせ、そのプレゼンテーションにおける要点を聞き手に正しく理解させ、評価をさせる能力を磨くことを目標とする。受講生それぞれの専攻や興味に基づいて、文学、科学、芸術などからトピックを選択させ、実際に会議でプレゼンテーションすることを想定してその準備に取り組み、実践した上で、相互に評価を行う。	
	ビジネスイングリッシュ	これまでの学習で身につけた知識や能力を土台に、ビジネスの場面を想定した高度な英語力を身に付けることを目標とする。少人数のグループまたは個人で関心がある企業を選び、その企業の業績や株価などを分析した上で、その結果をグループワークまたは個人ワークとして英語で発表し、レポートにまとめる。	
	英語海外研修 A	アメリカ社会に身を置くことで、実践的な英語力を養成する。アメリカ人との交流を通じ、異文化理解力を深め、国際性を養うことを目標とする。本学の協定校であるネブラスカ州立大学オマハ校（アメリカ）において3週間の語学・文化研修を行う滞在プログラムを実施し、英語研修だけでなく、アメリカ文化体験やネブラスカ州横断旅行、および現地学生との交流を通じ、異文化体験、異文化理解を深める。ネブラスカ州横断の1週間以外はすべてホームステイであり、英語を使わなければならない環境に身を置くことで、英語の実践力の養成を図る。	共同
	英語海外研修 B	カナダ社会に身を置くことで、実践的な英語力を養成することを目指す。また、カナダ人との交流を通じ、異文化理解力を深め、国際的な人材になることを目標とする。本学の協定校であるアルバータ大学（カナダ）において3週間の語学・文化研修を行う滞在プログラムに参加する。プログラムは英語研修だけでなく、カナダ文化体験やロッキーツアー、および現地学生との交流を通じ、異文化体験、異文化理解を深める。3週目はすべてホームステイであり、英語を使わなければならない環境に身を置くことで、英語の実践力の養成を図る。	共同
	スポーツ I	スポーツを通じ、「こころ」や「からだ」をバランスよく調和させ、仲間と充実した時間を過ごすことが、いかに健康で豊かな生活を手に入れることに結びつくか、授業を通して実感し、それを獲得することを目標とする。クラス毎に、ネオホッケー、フライングディスク、ターゲットゴルフ等の個別の種目を取り扱う。	共同
	スポーツ II	運動を行うことの意義や安全に行うために必要な知識を得るとともに、非言語的コミュニケーションが機能するスポーツ実践・身体運動を通じて、他者とのコミュニケーション能力を育み、社会性を育てることを目標とする。クラス毎に、テニス等の個別の種目を取り扱う。	共同
	健康体育実技 I	日常的な自身の活動量や質に気づき、自らの生活の質を高め、身体をコントロールして目的を達成する喜びや自分自身の身体への気付きを再発見し、運動が健康的な生活に必須であることを学ぶことを目標とする。クラス毎に、バスケットボール、ハンドボール等の個別の種目を取り扱う。	共同
	健康体育実技 II	自身の健康について考え、生涯にわたって運動を実行するための知識・能力を育成することを目標とする。クラス毎に、バレーボール、バドミントン等の個別の種目を取り扱う。	共同
	健康体育演習	身体そのものを多角的に捉え直し、生涯にわたって健康を維持・増進するための知識と実行力を身に付けることを目標とする。ウォーキング、トレーニングやダイエット等をテーマとして身体への理解を深め、生涯にわたって健康維持・増進できるようになるための気付きを提供する。	共同
	キャリアデザイン	本授業では、大学生活3つの柱である学び・人間関係・将来のキャリアについて、考える習慣をつくることを目指す。また、生活と学びの基盤となる大学と地域についての理解を深め、自らの主体的なキャリア形成に活かしたり、社会変化と働き方、男女共同参画社会についての理解を深め、自らの主体的なキャリア形成に活かしたりすることのほか、経験から得た学びを自分の言葉で表現し、他者により良く共有することを目標とする。そのために、学びと生活の基盤となる大学・地域・社会について理解を深めながら、自らの主体的なキャリア形成に向けた大学生活の歩み方を考える。毎回授業後に、授業内容を踏まえた考察や疑問などを提出させ、次回の授業以降にて一部のフィードバックを行う。 (オムニバス方式・一部共同/全8回) (⑨ 須藤智・29 宇賀田栄次・81 滑田明暢/2回) (共同) 先輩やOBOGの大学生活の歩みなどを通して、自分のキャリア形成について考えさせる。映像教材を用いて、今後、静岡大学でどのように学ぶのかを考えさせる。 (⑩ 須藤智・81 滑田明暢/1回) (共同) 職場や生活場面における男女共同参画の現状を理解させ、それとの関わりから各自のキャリア形成を考えさせる。 (⑨ 須藤智/1回) 静岡大学の全体像や学修環境についての基本的知識を教授する。 (29 宇賀田栄次/3回) 大学生活の3つの柱(学び・人間関係・将来のキャリア)について考えさせる。 日本や世界における社会変化を踏まえた働き方の基本的知識を教授する。 経験を振り返り、整理・記録する重要性を理解させる。また、その経験を自分の言葉で表現し、他者と経験を共有する方法を解説する。 (67 雨森聡/学生対応及び評価) 授業期間を通じて学生対応及び学生の評価を行う。 (81 滑田明暢/1回) 生活と学びの基盤となる地域の特性について解説する。また、学生のキャリア形成や大学での学びを地域との関わりから考えさせる。	オムニバス 共同 (一部)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目 教養展開科目	哲学	日本の思想は厳密には哲学と呼ぶことはできないかもしれないが、人間とは何か、生きるとはどういうことか等、哲学とも共通する問題について、西洋とは異なる文脈の中で思索を展開してきた。そのような思索の歴史がベースとなって、今日の西洋哲学の受容も行われている。この授業ではそうした日本の思想についての知識を得るとともに、哲学・倫理学分野のものの見方や考え方に親しむことを目的とする。授業では、古代～近世の日本思想史のうちの主要な思想について解説する。	
	歴史と文化	異なる地域、異なる時代の歴史について学ぶことにより、現在の日本や日本の歴史について比較・考察するための知識や理解力を養うことを目的とする。具体的には、中世ヨーロッパの歴史について、政治史・事件史的ではなく、当時の人々の暮らしぶりに着目して学ばせるとともに、視覚的な資料を用いて想像力を豊かにし、現在の日本との生活との違いを考えさせる。	
	ことばと表現	人文科学の知の有り様について考察し、専門の学問に活かせるようにすること、また、生活の中の人文知に目を向けられるようにすることを目指す。文学不要論が広がっている現在、専門外の「教養」として、言語文化的考え方を改めて伝える。材料は主に日本の言語文化現象だが、その時の旬の話題を織り交ぜつつ、古典からサブカルチャーまで様々なものを取り扱う。	
	日本国憲法	多くの人にとっては日頃あまり身近に感じることはない日本国憲法について、その全体像を概観し、憲法の基本事項を修得することを目標とする。私たちの日々の生活の中にあるさまざまな問題に憲法がどのように関わっているのかを、時事問題など具体的な事例を通して解説し、その歴史や背景、憲法のさまざまな規定が自分たちの日々の生活や人生にどのようにかかわるのか、自分たちが国家にどのように向き合い、憲法をどのように活かしていくのかを考えさせる。	共同
	法と社会	法は社会の鏡とも言われる。この講義では、法という概念、法律学の基礎を理解すること、その上で、私たちの生活をとりまくさまざまな法について、具体的な事例を通して、その概要や役割、現状や問題点など基本的な知識を修得すること、それを通して法を身近なものとしてとらえ、それを活かすことができる感覚や必要とされる法的思考を身につけ、社会をみる眼を養うことを目標とする。 本授業では、法と道徳、国内法の序列など法律学の基本について概説したのち、主要な国内法である民法、刑法、日本国憲法などを取り上げる。さまざまな社会問題を法的にとらえ、自分たちの問題として考え、活かすための手がかりを提示する。 (オムニバス方式／全15回) (5 朱暉／5回) 民法と消費者法を中心に解説する。 (8 吉川真理／10回) 刑法と憲法を中心に解説する。	オムニバス
	経済と社会	私たちはいろいろなものを消費することによって日々の生活を営んでいる。そして、それらのものの大部分は、スーパーやコンビニエンスストアなどのお店から購入している。お店に行けばいろいろな商品が並んでいることに疑問を持つ人は多くないだろう。だが、そもそもなぜ、お店には商品がきちんと並んでいるのだろうか。それは、流通がきちんと整備されているからである。流通が整備されていない地域では、商品を手入手するために大変な苦勞を強いられる。流通は私たちの生活基盤を形成する上で不可欠なものなのである。そこでこの授業では、生活基盤を築くために不可欠である流通と商業の基本的な仕組みについて教授する。これらを通じて、流通と商業の基本的な仕組みを知ることを目指す。	
	現代の社会	人間・社会について、歴史・文化・制度といったさまざまな条件を考慮し、深く理解することができ、同時に共生への志向を尊重できるようになることを目指す。社会学は、ミクロな人間関係からマクロな社会構造にいたるまで埋め込まれた社会秩序とその変動を分析し、現代的な社会問題を多角的に解明する。この講義では、半期の間に様々なトピックを取り上げることで、社会学的な発想法や分析視角、そして研究法のバリエーションを知る機会とする。クラス毎に、＜学歴社会＞＜就職・就活＞＜ジェンダー＞＜子どもの福祉＞＜家族＞＜障害＞等の異なるテーマ・視点を取り扱う。 (オムニバス方式／全15回) (16 富田 涼都／2回) 現代の野生動物と社会文化の課題（鳥獣害からの問いかけ、捕鯨からの問いかけ） (29 宇賀田 栄次／2回) キャリア教育政策と就職、新卒労働市場と就職率 (47 冬木 春子／3回) 現代社会における家族の変化、変容する家族と地域、男女共同参画社会と子育て (51 山本 崇記／3回) 親と暮らせない子どもの福祉・家族制度から見た親子と社会（養子縁組、里親制度、児童養護施設） (67 雨森 聡／3回) 家族が子どもの大学進学に与える影響（社会階層、第一世代問題、まとめ） (72 生川 友恒／2回) 社会モデルからみる障害観と共生社会に向けた動向、高等教育機関における障害学生支援の現状と課題	オムニバス
	心理学	私たちの生活に密着した学問である心理学の基礎的な知識を習得する。そして、それらの知識を、自らの今後の生活や研究分野にどのように生かせるのかを考えることができるようになることを目指す。実際に、心理学研究で行われた実験、調査、検査等について体験し、実践的に知識を学ばせる。授業はテキストに準拠し、パワーポイントを使ってそれぞれの内容を具体的に説明する形式をとる。	
地域と文化	地域の文化に対して、どのように学び、理解を深めるか。この点について実際のまちづくりの事例をもとに、具体的に紐解いていく。その過程で、ネット上のデータだけではなく、文献、行政資料、博物館を活用したフィールドワークの技法を学び、身につけることを目標とする。その上で自らが学ぶ静岡県の地域と文化について、自分なりに問題を設定して探求できることを目指す。新潟県でのまちづくりのフィールドワークを扱った拙著をテキストとして、具体的に各種データの扱い、そしてそれを通してどのようなことが理解できるかを学ばせる。そうした作業を踏まえ、主に静岡県に根ざす地域のテーマ（お茶、静岡空襲、登呂遺跡など）とそれに関する博物館の活用法について議論をさせる。そうした作業を通じて、最終的には受講者それぞれの問題意識に基づいたテーマを立てて、自ら探求する作業を行わせ、まとめとする。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目 教養展開科目	芸術論	幅広い分野にわたる芸術の歴史と現在を、多様な領域から概観し、これからの芸術と社会・生活・教育の関わりについて、受講生それぞれにビジョンを持たせることを目標とする。クラシック音楽、絵画、彫刻、美術教育など多様な領域の概説により、各分野の特徴や表現・鑑賞のポイントを説明する。また、日常生活においても芸術に親しませることで、その役割や価値に対しても具体的な事例を通して理解を深めさせる。	
	世界のことばと文化	学生自らが学びたい初修外国語を決めた上で、外国語がどのように自分たちの生活に関わってくるかを理解することを目標とする。中国語・現代韓国語・フランス語・ドイツ語・スペイン語の言語・文化・社会等について教授する。	
	数学の世界	微分積分学の発展の歴史およびその意味の理解と、1変数関数の微分、1変数関数の積分の理解を目標とする。講義では、微分積分学の歴史、微分積分学の意味と、1変数関数の微分・積分について教授する。	
	数理の構造	古典的な数学からの話題を通して、数理学の一面を理解できるようになる。また、数学を専攻としない学生の素養として、数理学の考え方の一端を理解できるようになることを目指す。日常の身近なところにある数学的なもの(数、図形、自然現象の数理など)を題材に、数理学への橋渡しをする。また、その過程で現れる様々な論証や証明方法を考察し、数学的なものの考え方や論理的な推論を議論する。高校の数I数A程度の知識から出発し、「大学レベルの数学」を紹介する。	
	自然と物理	物理学の基礎知識を学ぶことによって、自然の成り立ちと法則を知り、多様な現象に対して科学的・物理学的視点から考えることができるようになることを目指す。はじめに、自然現象を理解するための基礎として力学を学び、熱力学と統計力学、電磁気学、量子力学の初歩、相対論入門を解説する。それらの内容を通して、物理学的な思考方法に親しませ、様々な現象、技術の理解に役立つかを理解させる。授業予定の最終週分についてはオンデマンド形態で実施する。	
	化学の世界	私たちが取り囲んでいる大気や大地、日常生活用品は、様々な物質で構成されている。大気や、地表、河川、海、生き物、建物、衣服など、私たちは物質に囲まれて日々を生活している。こうしたいろいろな物質の性質や様子を調べ、多くの情報を与えてくれるのが化学である。地球温暖化の問題や、私たちの健康の問題まで、化学の視点でそれらを調べ、化学の視点で考えられるようになることを目指す。最近の化学分析の結果を基に、地球の大気の状態を考えたり、氷の分析から地球の過去の様子を考えたり、我々の周りの水質を考えたり、健康や味を化学的に考えたりさせることによって、化学的な考え方を身につけさせる。	共同
	生物と環境	多様な環境に生育している生物の適応戦略の仕組みを理解することで、急速に変化する科学や環境下の将来の仕事や日常生活において適切に判断できるスキルを身につけることを目指す。また、自然や環境との「つきあい方」についての具体的な考えを醸成する。クラス毎に、森林生態学、植物病理学、分子生物学、系統生物学、生態学等の異なる分野を取り扱う。	共同
	地球科学	静岡市はプレートの沈み込み帯に位置する。まずは地球の誕生とプレートテクトニクスの役割を概観し、マントルと鉱物の構造相転移について理解させる。地球を構成する物質と、プレートの沈み込み帯での地震、温泉、火山などの地学現象を理解するために基礎的な知識のほか、岩石を構成する鉱物の構造、化学組成などの基礎的事項についても習得させる。 (オムニバス方式/全15回) (46 川本竜彦/8回) 太陽系の惑星や表面地形など、リソスフェア・アセノスフェアやアイソスタシーなど、熱伝導・熱対流や海底の深さ・年代など、超大陸やマントルの熱史など、惑星の大気の組成や火星隕石など、炭素循環や酸素濃度史など、プレートテクトニクスについて解説する。 (76 田阪美樹/7回) 岩石・鉱物とは、鉱物の化学組成や固溶体など、結晶形態の規則性や劈開など、火成岩・火成作用やマグマのでき方など、変成岩・変成作用、プレートテクトニクスやプレート境界について解説する。	オムニバス
	科学と技術	人間の生活と緊密な関係にある「環境・住まい」について、森林、環境、建築材料、資源循環、エネルギー利用、住まい方、居住者への影響など、環境と人間の視点から「環境・住まい」を総合的に捉えることにより、生活の器である住宅と環境との関わりを理解することを目標とする。テーマ毎に講義形式で授業を進め、内容の理解を助けるためにスライド、ビデオなどのビジュアルを使用する。人間の生活の器である住宅と環境との関わりを科学的、工学的見地から捉え、これからの環境・住居のあり方を学習する。 (オムニバス方式/全15回) (6 青木 憲治/2回) セルロース系新素材、セルロースナノファイバーとその利用について解説する。 (18 本橋 令子/1回) バイオエネルギーの利用について解説する。 (41 山田 雅章/4回) 森林と木材についての導入を行い、生活の中の木材複合材料と接着、接着技術を利用した製品や建物、木質材料と室内空気質について解説する。 (43 小島 陽一/3回) 樹木・木材とは、建築材料と耐久性、新規木質材料について解説する。 (69 小林 研治/2回) 在宅授業住宅と災害、建築の歴史と技術について解説する。 (90 小川 敬多/1回) 住宅と環境について解説する。 (23 小堀 光/1回) 木質材料の進化について解説する。 (93 田中 孝/1回) 木材中のセシウムの除染方法の開発について解説する。	オムニバス

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目 留学生科目	日本語Ⅰ	大学での勉学や日常生活に必要な日本語能力をさらに伸ばすための練習を行い、講義が聞き取れるようになること、講義を聴きながらノートが取れるようになること、聞き取ったことや読んだものを口頭でまとめ発表できるようになること、ディスカッションに参加できるなどの勉学生活に必要な技能を身につけることを目指す。授業では、講義聴解の技術、ノートの取り方、口頭によるまとめ方、ディスカッションの仕方等について教授する。	
	日本語Ⅱ	引用と出典が明示できるようになる、レポート作成のルールを理解する、レポート作成のルールに則ったレポートが書けるようになることを目指す。山口裕之(2013)『コピーと言われないレポートの書き方教室 3つのステップ』をテキストに、レポート作成のルールを教授する。また、レポート作成のルールに則ったレポートを書けるようになるために、課題を設定し、参考文献を検索させたうえで、資料とデータに基づくレポートを作成させる。さらに、引用に関する確認テストを課す。	
	日本語Ⅲ	学習・議論・研究に欠かすことのできない「ことばの力」を形成し、良質な学びの場を参加者で構築することを目指す。日々の学究活動に欠かせない表現力・思考力・判断力および他者と協働して学び合う力の向上を目指し、対話を通じたグループワークを行わせる。具体的には、各回、講義関連資料をTeamsから入手(視聴等)させ、テキストの内容に沿った活動をさせる。テキストと解説音源にしたがって履修生同士で対話を実践し、その報告を課題とする。最後の2回はグループ毎の発表を行う。	
	日本語Ⅳ	学期を通して、さまざまな場面での「異文化コンフリクト」をケース学習やクラスメートとのディスカッションで体験し、多角的に人や社会を見る力をつける。また、日本社会でステレオタイプで語られるテーマについて、グループごとにパネルディスカッションをし、社会を柔軟に観察し分析できる思考力を身につけることを目指す。そのために、①コミュニケーションとはなにか、②職場の異文化衝突のケース学習、③現代日本社会のステレオタイプの価値観を疑うこと等について、パネルディスカッション等の活動も通して考えさせる。	
	日本語Ⅴ	日本語コミュニケーション力・社会人基礎力を高めて就業力を向上させること、自分自身についての情報や考えを口頭でわかりやすく伝えられるようになること、また、基本的な書類やビジネスメールが作成できるようになることを目指す。そのために、自分の経歴、性格、考えを表すための語彙や表現を教授し、文書や口頭で伝えることを課す。また、ビジネス場面を想定した挨拶、自己紹介、訪問の仕方、文書の作成などの実践的な練習を行うほか、調査・取材した内容をまとめて文章を作成し、スライドを使ったプレゼンテーションをさせる。	
	日本語Ⅵ	社会情勢や興味がある業界の状況などについての情報を収集し読み込み、要約・意見を文章にまとめさせ、それについて討論・発表を課す。また、自分の興味・関心・専門性を具体的なビジネスの企画につなげるようなプレゼンテーションを行うため、スライドやレジュメなどの発表資料を作成させる。自己分析、企業・業界・職種研究を行い、志望企業を想定し、志望動機、希望の職種、業界の状況・課題についての意見等をまとめたプレゼンテーションを行わせる。さらに、ビジターセッション等を通じ、場面に応じた待遇表現の使い分けを習得させる。これらを通じて、就業力を向上させることも目標の一つとする。	
日本事情	外国での生活において必要不可欠な異文化コミュニケーションの基礎知識を養い、その知識をいかに実践的に役立てるかを考えさせる。毎回の講義では、異なる文化に対するとらえ方・接し方についてグループ活動やグループ・ディスカッションを中心に考察していく。また、感想文の提出を通して授業内容をより実践的な学びとしてとらえさせ、これまでの自分自身のコミュニケーションのあり方を内省させる。このクラスには日本人学生も参加できるようにすることで、留学生とともに異文化を考える機会を与える。		
学部共通科目 グローバル系科目	Oral Communication I	学部の教育で重点目標のひとつである国際コミュニケーション力を養成する1年次の必修科目である。受講者がリスニングとスピーキングの能力を伸ばし、英語での日常会話を達成感をもって行うことができるという感覚を得るために、授業担当者は身近な話題(自己紹介、好きなこと・嫌いなこと、頼み事の依頼、自分の経験を語るなど)の素材を予習課題として提供する。授業時間中には、予習状況を確認する小テストなどを行い、授業担当者が会話例を示した上で、二人一組、あるいは小人数グループをつくり、(課題で学んできた内容や会話例を参考に)受講者が自分で考え、互いに会話を行う。	共同
	Oral Communication II	学部の教育で重点目標のひとつである国際コミュニケーション力を養成する2年次の必修科目である。Oral Communication Iで培った能力をもとに、受講者は、英語での大学生としての日常会話を的確に行う能力を獲得していく。毎回、特定の場面を想定し(指示する、慰める、比較する、抱負を述べる、一般論を述べる、相手を受け入れた上で自分の意見を言う、など)、文法事項の確認も行うことができる課題を授業担当者が提供する。授業時間中には、予習状況を確認する小テストなどを行い、授業担当者が会話例を示した上で、二人一組、あるいは小人数グループをつくり、(課題で学んできた内容や会話例を参考に)受講者が自分で考え、互いに会話を行う。	共同
	Reading & Discussion I	学部の教育で重点目標のひとつである国際コミュニケーション力を養成する2年次の必修科目である。日常的な話題について英語の文章を理解し、それについて自分で考え、意見を述べる能力を身につける。予習課題として、500語から1500語程度の文章を読み、そこでの議論に関する自分の考えを書き留めおくことが授業でのディスカッションのための準備となる。この準備を行ってディスカッションの場に臨むことが段階を踏んだ練習となり、受講者は、比較的単純な話題について、即興的に自分から話を始めたり、他人の話に応じたりすることができるようになる。的確な質問を投げかけ、的確な答えで応じ、他人の意見に賛成、あるいは反対の意見を述べ、なぜ自分がそのように考えるのか理由も述べるようになる。	共同
	Reading & Discussion II	学部の教育で重点目標のひとつである国際コミュニケーション力を養成する3年次の必修科目である。Reading and Discussion Iで培った能力をもとに、社会的な重要性あるいは地球規模で考えた場合の重要性をもつ話題について英語で議論する能力を身につける。予習課題として、1200語から2000語程度の記事や論文を読み、そこでの議論に関する自分の考えをもつことが授業でのディスカッションのための準備である。授業時間中に、授業担当者は、受講者が課題の文章をどの程度理解しているか確認する。また、ディスカッションで使える用語、言い回しなどを示す。その後、二人一組、あるいは小人数グループをつくり、(課題で学んできた内容や説明で示された例を参考に)ディスカッションの場をもつ。また、関連する記事や論文をみつけて、それを読み、概要を把握して、クラスに紹介し、評価を述べることも順に担当する。	共同

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部 共通 科目	グローバル系科目		
	English Writing	学部の教育で重点目標のひとつである国際コミュニケーション力を養成する選択必修科目のうちの1科目である。的確な文章を書き、構成を考えて効果的に意図を伝えるパラグラフを組み立ててレポートを書く能力の獲得を目指す。論点や個人的な意図などをみつけて書き、推敲の重要性を認識し、書いた文章を他人に見せる段階に仕上げていく習慣をつけるために、次のような段階を踏む。1) ある話題について、課題文を読んだり、グループで、話題を話し合ったりして、自分が書きたい内容を考えておく。2) さまざまな話題について考え、250語から300語程度の作文を書く。パラグラフ5つから成る構成を整えた論考を執筆する。3) 15項目の文法事項の確認を行い、「よくある間違い」を認識し、修正する。	共同
	English Presentation	学部の教育で重点目標のひとつである国際コミュニケーション力を養成する選択必修科目のうちの1科目である。良いプレゼンテーションを行うための能力を獲得する。受講者が英語で効果的なプレゼンテーションを行うことができるように、授業担当者によるモデル・プレゼンテーションから始め、話し易いテーマでの受講者のミニ・プレゼンテーションを経て、高等教育の場に相応しいテーマでのプレゼンテーションに進む。聴衆としての反応のしかたにも重点をおく。授業時間中は次の活動を主に行う。1) 授業担当者からの指導を得る。2) グループで自由な発想でアイデアを出し合う(ブレインストーミング)。3) プレゼンテーションを行い、クラスメイトとの質疑応答を行う。4) プレゼンテーションについて相互評価を行い、また、授業担当者による評価を受ける。	共同
	English Global Studies	学部の教育で重点目標のひとつである国際コミュニケーション力を養成する選択必修科目のうちの1科目である。受講者は、英語使用の授業(英語による講義形式の授業を含む)に参加するための能力を獲得し、地球規模の問題や異文化理解について知識を深め、世界市民としての責任を果たすことのできる人物になる。話題としてとりあげるのは、例えば、サブカルチャー、貧困、宗教、教育、人種問題などである。受講者は、このような事項に関する記事を読み、講義を聞いて、視野を広め、異文化理解について考察し、時にその難しさを知り、そして世界の時事問題について考え、世界で通用する視点を獲得する。授業中のディスカッションでは、関連する問題について意見を述べ、ディスカッションを成り立たせる。	共同
	コラボラティブ・アプローチ基礎演習	この授業では、グループ活動を通して他者との協力の仕方や調査の一連の流れを学ぶ。社会的課題に取り組む上で、現場(フィールド)に出ることや、そこでさまざまな関係者(ステークホルダー)とのかかわり、課題を発見し、特定することは非常に重要である。また、明らかになった内容を他者に伝え、その後の課題解決につなげてゆくことも重要である。この授業では写真調査法や地理学的調査法などを用いて調査の一連の流れを経験し、成果の発表を行うことを通じて、そのための基本的な素養を身につける。	共同
	海外研修プログラムⅠ	本プログラムでは、学部専属の海外派遣コーディネーター教員と全学の担当教員との連携した指導の下、履修希望者が1・2年次に二週間程度の(オンライン海外研修も含めた)海外研修に参加し、英語に限らず研修先で使われている言語によるコミュニケーション力の向上、異文化理解、国際感覚を見つける。具体的には、現地の大学や語学学校等で語学研修を受け、語学力やコミュニケーション能力の向上を養う。また現地で開催される様々なアクティビティ(例えばスポーツイベントや文化的行事や歴史的建築物見学等)に参加したり、現地の学生や地元の人達との交流を深め、本学部が学生に求める「人間とはどうあるべきか」に立ち戻り、人間そのものに対する理解を深めるスキルを得る。帰国後、本研修プログラムで得た語学スキル、異文化理解、国際感覚を活用し、本学部で開講されている外国語科目での学びで発展させながら、3年時に開講される「海外研修プログラムⅡ」へ繋げる。	共同 集中
	海外研修プログラムⅡ	「海外研修プログラムⅠ」を履修済みの学生向けに開講予定のプログラム。学部専属の海外派遣コーディネーター教員と全学の担当教員との連携した指導の下、現地の大学等への留学(半年程度)や、専門性の高い研修を経験する事で、1・2年次で学んだ外国語科目や「海外研修プログラムⅠ」を通して習得した語学力や異文化理解や国際感覚をさらに発展させる。特に本学部の語学教育におけるポリシーである国際社会および地域社会の課題解決のため、グローバルな視点から対象をとらえるツールとして語学運用能力を身につける。具体的には研修先の大学等で、よりアカデミックな語学研修を受け、渡航前に身につけた語学力を現地にてさらに発展させる。また語学力向上だけでなくとどまらず、現地の学生や人と交流する事で、国際感覚や異文化理解をより一層深める。帰国後はこの研修プログラムで得たアカデミック語学スキル、異文化理解、国際感覚を専門科目で応用させる。	共同 集中
	コラボラティブ・ワークスⅠ	「コラボラティブ・ワークスⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」は、社会との関わりを通じて、社会的課題の①参与、②発見、③探求、④解決のプロセスを経て、持続可能な未来づくりの担い手(課題解決人材)となってゆくことを目指す授業である。 【ステークホルダー/フィールド等に関する関連情報の収集と精査：①体験から参与へ】 「コラボラティブ・ワークスⅠ」では、自分の関心に適切に合致する対象先やテーマを選択し、行政やNPO、企業、地元住民などの多様な人々とコミュニケーションをはかりながら、社会的課題やステークホルダー、フィールドなどへの理解を<体験>的に深める。そのうえで、自分の問題意識を明確にし、社会的課題やステークホルダー、フィールドなどとの継続的な関わりを計画する。社会的課題やステークホルダー、フィールドなどに関わる専門的な知識や方法、先行研究などを収集・整理・分析し、本格的な<参与>に向けた準備を行う。	共同
コラボラティブ・ワークスⅡ	「コラボラティブ・ワークスⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」は、社会との関わりを通じて、社会的課題の①参与、②発見、③探求、④解決のプロセスを経て、持続可能な未来づくりの担い手(課題解決人材)となってゆくことを目指す授業である。 【コラボラティブ・ワーク/フィールドワークの担い手としての自覚：②発見】 「コラボラティブ・ワークスⅡ」では、「コラボラティブ・ワークスⅠ」で選択した社会的課題やステークホルダー、フィールドのもとで、引き続き、行政やNPO、企業、地元住民などの多様な人々とコミュニケーションをはかりながら、それらについての理解をさらに深め、そこでの課題の<発見>を行う。またコラボラティブ・ワークやフィールドワークの特性を理解し、教員・学生グループ内の共創力を身につける。	共同	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部共通科目	グローバル系科目 コラボラティブ・ワークスⅢ	「コラボラティブ・ワークスⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」は、社会との関わりを通じて、社会的課題の①参与、②発見、③探求、④解決のプロセスを経て、持続可能な未来づくりの担い手（課題解決人材）となってゆくことを目指す授業である。 【コラボラティブ・リーダーとしての活動：③探求】 「コラボラティブ・ワークスⅢ」では、引き続き「コラボラティブ・ワークスⅠ・Ⅱ」で選択した社会的課題やステークホルダー、フィールドのもとで、専門的知識とコラボラティブ・ワーク、およびフィールドワークとの往復作業を通じて、ステークホルダーやフィールドにおける課題の背景や現象、要因、結果、構造を理解し、それについてのさらなる「探求」を行う。またコラボラティブ・ワークやフィールドワークのマネジメントを通じて、社会的課題やステークホルダー、フィールドなどに対して専門的知識を応用し活用できるリーダー的資質を身につけて、それを実践する。	共同
	コラボラティブ・ワークスⅣ	「コラボラティブ・ワークスⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」は、社会との関わりを通じて、社会的課題の①参与、②発見、③探求、④解決のプロセスを経て、持続可能な未来づくりの担い手（課題解決人材）となってゆくことを目指す授業である。 【持続可能な未来社会づくりの人材：④解決】 「コラボラティブ・ワークスⅣ」では、専門的知識とコラボラティブ・ワーク、およびフィールドワークを往復する作業を通じて、「コラボラティブ・ワークスⅡ・Ⅲ」で発見し、探求を深めた社会的課題の「解決」に向けた方策を構想し、それを提案・実現する。また社会的課題に関する調査・分析・「解決」方策に関する活動成果を公表し、ステークホルダーに還元する。さらに社会的課題の解決策の実効性を測定し、社会的課題やステークホルダー、フィールドなどへの責任ある関わり方を共創する。	共同
	コミュニティサービスラーニング	「サービスラーニング」とは、地域課題解決に向けた活動の一部を実際に担いながら学びを深める教育カリキュラムである。本科目では、NPOやまちづくり団体などが主体となり、地域の「コミュニティ」で行われる協働活動への参加を通して、問題解決能力や批判的思考力、社会認識の向上を目指すほか、市民性の涵養による地域社会への主体的な関わりを促進する。授業は事前学習、実習、事後学習に分かれ、事前学習では学びの視点を整理した上で、一定時間以上の学外での実習に取り組み、省察を通して社会貢献活動と学問的知識・技能の構造的な統合をはかる。	
	ファシリテーション概論	「容易にする」「促進する」を意味する「ファシリテーション」は、さまざまな話し合いを円滑に進める技法の1つとして、ビジネスや地域活動における討議や対話の場で欠かせないものとなっている。本科目では、ファシリテーションに必要な考え方や技術を理解するとともに、まちづくりの活動例などからファシリテーションの実践や展開が地域にどのような意味や価値をもたらすのかを探究していく。本科目での学びは、ワークショップをはじめとする参加型の場づくりに生かすだけでなく、課題を共有する利害関係者が支え合うことで課題解決に向かう仕組みづくりの支援・促進への貢献を目指す。授業は講義のほか、グループワークを取り入れ実践的に行う。	集中
	アートラボ	この授業は、アート、サイエンス、テクノロジーといった学生の志向する分野にとらわれず、自分たちの生活、コミュニティ、環境を理解し、変革できるような技術や体験を生み出すための演習講義である。これからの社会課題に対して、学んできた思考法や発想法をどのように活かすアウトプットしていくのか。2年間かけて学んできた発想をより柔軟に具現化にするために、実際にアートプロジェクトを行ったり、CADや3Dプリンターといった製図基礎技術を習得し、学生が主体的・共創的に研究に取り組むための講義である。 (オムニバス方式・一部共同/全8回) 1回(② 下村勝・⑭ 立花由美子/1回) (共同) ガイダンス 2～5回(② 下村勝/4回) 製図の基本知識、CADによる演習課題、3Dプリンタによる造形、産業プロダクトデザインに関する企業インタビュー 6～8回(⑭ 立花由美子/3回) アートプロジェクトにおけるプランニング、制作、実践	オムニバス共同(一部)
データサイエンス系科目	基礎数学	データサイエンスに係る具体的な技法を修得することは、文系・理系を問わず将来に資する知識となる。その理解のためには、高校数学よりも高度な大学初等レベルの線形代数や微積分の知識が必要となるため、本授業では、これらの数学を、真の道具として使えるようになることを目指す。	
	データサイエンス基礎	近年、インターネットをはじめとする情報基盤技術が社会へますます浸透し、日々様々な分野でデータが生み出されるようになった。これらのデータは目的に応じて適切に分析、利用されるべきであり、その技術は今後ますます重要になる。本講義では、まずデータサイエンスの活用事例を通じてその重要性を理解し、その後データ処理の基盤となる技術(データの観察、分析設計、統計学基礎、統計検定、データの可視化、アルゴリズム)の習得することを目指す。	
	データサイエンス演習	データサイエンス基礎で学んだデータ処理の基盤となる統計学の基礎や統計検定法等について、コンピュータを用いて演習形式で習得することを目指す。具体的には代表値、分散、標準偏差、相関係数、回帰直線、確率分布、正規分布、有意差検定(χ ² 乗検定、マン・ホイットニー検定、T検定)、クロス集計、回帰分析、ベイズ推論、サポートベクタマシン、k近傍法、k平均法などについて学ぶ。	
	データエンジニアリング基礎	データサイエンス基礎で学んだ「データ」は、そのままでは活用することができない。本講義ではデータの種類やデータベース、ネットワーク、セキュリティー、システムの導入、システムの運用、企業活動におけるITの活用、法務と財務など、データを安全に活用するための知識を習得することを目指す。	
	AI基礎	AIはすでに社会を支える基盤技術となっているが、これからさらに発展し、あらゆる方面で利用されるようになると思われる。したがって、情報科学の専門家だけでなく、それ以外の分野を専門とする人材であっても、AIの基礎知識を習得する価値があると考えられる。なぜなら、実データを用いた分析結果に基づく経営戦略、販売戦略、開発戦略など多方面に応用可能だからである。 本講義では、AI技術の進歩の歴史、AIの基礎となる機械学習の基本原則、種類と適性、AIの応用事例、AIと社会との関わりなどを分野横断的に学ぶことを目指す。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部 共通 科目	データサイエンス系科目 プログラミング演習 I	プログラミングは情報科学の専門領域だけの学問ではなく、人文社会科学、自然科学を横断するデータサイエンスの知識・技術として重要である。本科目では、プログラミング言語のPythonを用いて、変数とデータ型、リスト、タプル、辞書、条件分岐、繰り返し、関数、クラスなどについて演習形式で学ぶ。	
	AI演習	ディープラーニングを実現するために用いられるニューラルネットワークの技術的基盤について学習する。Googleが提供するライブラリを用いて実際に稼働するニューラルネットワークを構築し、一部、実データを用いた実習も行う。 本講義ではAI基礎の講義で基礎知識を身に着けた上で、練習用のデータおよび実際のデータを用いて種々のAIを用いた演習（ニューラルネットワーク、音声認識、画像認識、深層学習等）を行う。問題解決に際し、どのAI技術を使えばよいか的確に判断できる人材、AIの専門家と他の分野の橋渡しとなれる人材、あるいはAIを有機的に応用できる人材の育成を目指す。	
	プログラミング演習 II	プログラミングは情報科学の専門領域だけの学問ではなく、人文社会科学、自然科学を横断するデータサイエンスの知識・技術として重要である。本科目ではプログラミング演習Iの内容をさらに発展させ、フローチャート、探索（線形探索、2分探索）、整列（選択法、バブルソート、他）、文字列処理（探索、置換）、データ構造、統計量の計算などについて、チーム学習等を取り入れた演習形式で学ぶ。	
	共創科学調査法	本講義では、社会課題が多様化かつ複雑化する社会をとらえる調査方法としての社会調査の基礎知識とそのスキルを修得することを目指す。本講義では、とくに質的調査と量的調査について学修する。 (オムニバス方式/全15回) (15 川崎和也/8回) 社会調査の基礎知識について学修したうえで、質的社会調査のうち、インタビュー調査に関連する知識とスキルの修得を目指す。受講生は、調査の企画と設計、実践とともに、調査結果を整理・分析し、表現する方法を実際に取り組みながら学修する。 (81 滑田明暢/7回) 量的社会調査のうち、質問紙法を用いた調査に関連する知識とスキルの修得を目指す。授業では、調査の企画設計から調査票の作成、調査結果の整理、およびそれを報告して表現するまでの一連の作業についての解説を行う。授業は講義形式で進めるが、受講生はそれらの一連の作業にも携わりながら、その方法論を学修する。	オムニバス
	共創科学実験法（人間科学）	共創科学における基本的な研究方法である実験法について社会科学分野として心理学実験と身体科学実験を体験しながら方法論を学ぶ。実習を通して実験計画法、各分野ごとの実験法の基本的な考え方、実験実施のためスキル、実験データの収集、分析、レポート作成について学ぶ。最終的に、自らの研究活動において主体的に実験法を用いて研究計画を立案できるようになることを目指す。 (オムニバス方式/全8回) (9 須藤智/4回) 実験法の基礎、実験計画、研究倫理を概説する。2要因計画の実験計画について学習できる実験体験（データ収集、分析レポート作成）を行う授業とまとめを実施する。 (11 村田真一/2回) 相関、t検定の実験計画を学ぶことができる実験体験型の実習（データ収集、分析レポート作成）を行う。 (61 前東晃礼/2回) 一要因計画の実験計画を学ぶことができる実験体験型の実習（データ収集、分析レポート作成）を行う。	オムニバス
	共創科学実験法（自然科学）	共創科学の研究を支える実験法や調査法について、自然科学分野からは生物学および環境化学に関する基礎的な方法を選出し、それらの考え方、注意事項、実際の作業の様子などを講義形式にて紹介する。この授業を通じて、各種実験法・調査法の原理や方法の選び方、実験を実施するための基本的な知識を学ぶ。最終的に、卒業研究において適切な方法を選択し、正しく解析データを得られるようになることを目指す。	
共創科学系科目	総合人間科学概論	人間はその歴史において自分自身をさまざまな形で捉えてきた。その中でも主要なのは、①自らを<自由な精神>と見る立場、②<生命（身体）>と見る立場、そして、③<他者と共に生きる存在>と見る立場である。現代では、それぞれの見方は、心理学、身体科学・スポーツ学、倫理学、法学、情報学など、異なる学問領域において扱われるようになり、いまや「人間とは何か」を統一的に問うことは困難になっている。しかし、複雑な社会的課題を解決するべく異分野の専門家が協力する中で、相互の人間理解をあらためて問い直す場面も出てくるであろう。そのための土台づくりとして、本講義では、これまで培われてきた多様な人間理解を外観することにより、その多様性と重要性を理解できるようになることを目的とする。 本授業では、人間理解にアプローチしてきた心理学、身体科学・スポーツ科学、倫理学、法学、情報学の学問分野の基本的な考え方見方について講義で学ぶ。それぞれの学問分野の基本的な用語、考え方、方法論について学ぶ。 (オムニバス方式/全15回) (1 江口昌克/3回) 心理学の視点から見た人間 (3 堂園 俊彦 /5回) 哲学・倫理学の視点から見た人間 (8 吉川真理/3回) 法学の視点から見た人間 (9 杉山康司/3回) スポーツ・健康科学の視点から見た人間 (9 須藤智/1回) 情報学の視点から見た人間	オムニバス

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部 共通 科目	共創 科学 系科 目	バイオエコノミー概論	オムニバス
		国際地域社会とダイバーシティ	オムニバス
		コミュニティ基礎論	オムニバス

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部 共通 科目	共創 科学 系科 目 アートシンキング・デザ インシンキング	この授業は、アートやデザインという視点からの発想は、具体的にどのようにアウトプットされていくのか、実際に一線で活躍するアーティストやデザイナーを招聘し、あらゆる角度から概観する講義である。これからの世代を担う人類にとって、ますます複雑化し予測できない未来に対して、柔軟に発想していくことが重要である。そのため昨今では従来のロジカルシンキングに加え、デザイン思考やアート思考といった新しい思考法が注目され、従来のアートやデザインといった領域を超えて活かされている。本講義ではいかにしてアートやデザインが思考しているのかに触れ、自らの思考術に生かしていくための土台となる講義である。 (オムニバス方式/全15回) 1～7回 (14 立花由美子/7回) アートシンキングにおける事例研究 8～15回 (59 川原崎知洋/8回) デザインシンキングにおける事例研究	オムニバス
	人文・ 社会 科学 系科 目 国際地域共生概論A (静 岡・日本)	多様な地域課題の問題構造について分析し共創的に解決するため、静岡を起点とした県内・国内の具体的事例における種々のアプローチを学ぶ。 (オムニバス方式/全15回) (1 江口昌克/10回) 第1回 ガイダンス・国際地域共生とは 第7-15回 静岡県内における、自治体、民間企業、NPO団体をゲストスピーカーとして招き、地域共生のプロセスとその完成形を提示する。最終回は「まとめ」を行う。 (7 池田恵子/1回) 第4回 地域共生へのアプローチ③「防災まちづくり」にみる地域づくりの可能性 (9 須藤 智/1回) 第2回 地域共生へのアプローチ①高齢社会を想定した地域共生へのアプローチ (10 石川宏之/1回) 第3回 地域共生へのアプローチ②防災教育や観光振興に自然・文化遺産を活かした地域づくり (11 村田真一/1回) 第6回 地域共生へのアプローチ⑤「スポーツ」と「地域づくり」の関係について考える (14 立花由美子/1回) 第5回 地域共生へのアプローチ④ アートと地域のかかわり	オムニバス
	人間の尊厳と人権	人間そのものを学びの対象とし、国際社会や地域社会における人間相互および人間と社会との関係に目を向け、あるいは人間と生命圏環境との共生を図ろうとする学びの中では、人間にどのようなまなざしを向けるかが重要である。本科目では、哲学・倫理学の観点から捉えた「人間の尊厳」および法的な観点からの「人権」という概念装置を利用して、人間をどのように把握してきたか・把握すべきかということを学んでいく。 (オムニバス方式・一部共同/全15回) (3 堂園俊彦・10 正木祐史・8 板倉美奈子/2回) (共同) ①イントロダクション、⑮まとめ (3 堂園俊彦/4回) ②歴史における人間の位置付け、③さまざまな文化における人間の捉え方、④医療・福祉における人間の尊厳、⑤先端科学技術と人間の尊厳 (10 正木祐史/5回) ⑩生命・自由・幸福追求権と法の下での平等、⑪生存権と教育を受ける権利、⑫思想良心・表現・信教の自由、⑬女性・障害者・子ども等の権利、⑭A I と基本的人権との関わり (8 板倉美奈子/4回) ⑥人権の国際的保障の歴史、⑦主要な国際人権条約、⑧科学技術と人間の尊厳・人権、⑨戦争犯罪と国際刑事裁判所	オムニバス 共同 (一部)
	現代社会の認知科学	認知科学は、情報科学、心理学、身体科学、哲学、倫理学、工学など様々な学問分野の知見を統合し、人間の知的な振るまい、行動を様々な方法で記述し、人間の理解を目指す学際的な学問分野である。近年、新しい情報技術の登場で変わりつつある現代の情報化社会では、人間の知的活動の様相が変化しており、人間理解にもこれまでの認知科学に関わる学問分野の再統合を行い、新しい人間理解のための視点が求められる。本授業では、特に、現代の「情報化社会」の中での人間理解の基本的な視点の獲得を目標として、認知科学で積み上げられてきた基本的な知見について、人間理解のための知識を獲得することを目指す。 (オムニバス方式/全15回) (9 須藤智/8回) 認知科学における認知心理学で積み上げられてきた知見について概説する。 (19 祝原豊/1回) 身体科学の観点から人間の身体性について概説する。 (61 前東晃礼/6回) 認知科学における情報科学で積み上げられてきた知見について概説する。	オムニバス
	応用倫理学概論	本講義では、20世紀以降、社会的課題に対応するべく生み出された応用倫理学のさまざまな領域(生命倫理学、環境倫理学、情報倫理学、ビジネス倫理学、スポーツ倫理学など)概観し、これまでの成果と現在の課題を確認する。講義では、これらの倫理学の基礎となっている規範倫理学(義務論、功利主義、徳倫理学)やメタ倫理学の各理論についても取り扱う。	
	マネジメント論	マネジメントとは、良いことを上手に実現するための取り組みを意味する。特に集団で良いことを上手に実現するためにはマネジメントを行うことが必須になる。本授業では、経営学の基礎を学ぶことを通して、マネジメントに関する基本的な概念、理論、分析手法などの知識を修得するとともに、それらの知識を応用する能力を身につける。また、マネジメントの構想がソーシャルイノベーションの実現を目指すこと密接な関係になっていたという歴史的経緯を学ぶことで、現代社会におけるマネジメントおよび協働の重要性について理解する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部 共通 科目	人文・社会科学系科目 国際地域共生概論B(アジア・オセアニア)	この授業では、アジア・オセアニア地域についての知識を深めることに加えて、多角的な視野から国際社会や地域社会の現状、関係性、動態的变化などを理解するための視点と手法を学修することを目的とする。また、グローバル社会や地域社会の一員としての意識を持ちながら、多様な価値観にもとづいて、社会のために行動するための素養と動機を身につけることを目指す。 この授業では、多角的な視点からアジア・オセアニア地域の政治経済、歴史、文化、社会について学修する。 (オムニバス方式/全15回) (⑦ 池田恵子/8回) 地球規模の課題、多様性と包摂、持続可能性という現代的課題の観点からアジア地域を動的に理解し、私たちが暮らす日本社会との関りを考察する。アジア地域の課題を俯瞰し、グローバルな課題との関連において理解する視角を身につける。 (⑮ 川崎和也/7回) この授業では、まずオセアニアと日本との関わりを学修し、私たちがオセアニア地域について学ぶことの意味や目的を理解する。そのうえで、この授業では、開発や政治経済、民族問題など、現代オセアニア地域が直面する問題を取り上げ、オセアニア地域についての幅広い知識と深い知識を身につける。	オムニバス
	政治と社会	政治学の基礎的理解を得ることを目的とし、特に、社会の様々な公的な政策やルールなどが、どのように政治の場において決定されているのか、また、その決定の場に人々はどのように関与することが出来るのか、などを学ぶ。具体的には国政及び地方政治の各々のレベルにおいて、議会などの政治制度、政策決定の過程、政治参加の仕組みなどを、政治の具体的な事象も踏まえて理解する。	
	多文化共生論	グローバル化が進む中、地域社会が著しく変動する。その一例として地域社会を構成する住民の多様化及び増減、地域間競争による地域格差がある。本授業では多様化する地域社会における諸問題を理解し、世界とのつながりを考えるための知識を得ることを目標とする。具体的には「社会の少子高齢化問題」と関連する「外国人受け入れ問題」の基礎的内容を学ぶ。また他国の現状を比較しながらこれらの問題を解説する。学習内容の定着を高めるために少人数によるグループワークを多く取り入れる。	
	地球環境問題と法	本講義は、地球環境問題に関わる国際条約や関連する国内法令の概要、背景、現状と課題について理解し、SDGs、気候危機、カーボンニュートラルなど喫緊のグローバルな課題に向き合えるような知見を得ることを目標とする。前半では、環境法の歴史、基本原則、環境損害に対する法的責任について学び、後半では気候温暖化枠組条約・生物多様性条約に焦点を当て、条約体制や関連する国内法令について詳説する。最後に経済と環境の両立という課題に対する取り組みを取り上げ、地球環境に関わるグローバルな課題に対応するにあたり何が求められるのかについて考える。	
	臨床心理学概論	臨床心理学の学修の基盤となる知識を得るために、臨床心理学とはどのような学問領域であるか、臨床心理学の対象と領域、臨床心理学の基礎理論、心理アセスメント、心理療法について論じる。また、臨床心理学の全体像を理解するために、心の病理と対人援助の基本的な知識について概略を論じる。	
	スポーツ文化論	現代社会におけるスポーツの在りようについて理論的に解題する内容である。まず、スポーツが文化として醸成されてきた成果や課題について考察する。また、ディスカッションを通じて今日のスポーツ推進策について批判的に論及する。具体的には、「学校体育」「市民スポーツ」「競技スポーツ」を包摂的に捉えた「スポーツプロモーション」について考えていく。 (オムニバス方式・一部共同/全15回) (⑪ 村田真一・23 平嶋裕輔/2回) (共同) 「文化としてのスポーツ」をプロモーションするための具体策や課題について、グループディスカッションを行いプレゼンテーションを実施する。授業のまとめとして位置付ける。 (⑪ 村田真一/8回) スポーツの歴史と定義を理解する中で、「文化としてのスポーツ」について論及する。また、学校体育と市民スポーツの接続を問い直す中で、今日望まれるスポーツ推進策についてディスカッションを促す。さらに、「スポーツSDGs」についても思考を深める。 (23 平嶋裕輔/5回) 現代社会におけるスポーツで大きなインパクトを及ぼす「競技スポーツ」の推進について論及する。プロスポーツの存在・効果論をはじめ、近年の大学スポーツの高度化についても教授・展望する。	オムニバス 共同 (一部)
	国際地域共生概論C (欧米)	この授業では、現代のヨーロッパ・アメリカについて、教育・経済・生活など様々な視点から理解すること、また、形成してきた思想、歴史的経緯を踏まえつつ、今日的課題を取り上げて検討し理解を深めることを目標とする。EU統合を経て、世界が再編されるなか、今日の時事問題はどこに根があるのか。この授業では映像や新聞記事など多くの素材・資料を使いながら、これらの問題の検討を進める。	
	安全とリスクの心理学	リスクとは不確実性と損害という特徴を持つ様々な事象の総称であり、科学技術や複雑な社会活動を理解するうえで不可欠の概念である。本講義ではリスク概念と我々を取り巻く実際のリスクの多様性について理解を深め、リスク心理学の重要なトピックを、演習を交えながら学ぶ。 (オムニバス方式/全15回) (30 村越真/10回) 基本的なトピックである不確実性下での判断、ヒューリスティクスと認知バイアス、リスク知覚・ハザード知覚に加え、実践的な課題である、事故とヒューマンエラー、リスクマネジメントと状況認識を扱う。 (58 小杉素子/5回) 同調や集団意思決定、リスクコミュニケーションなど社会心理学的なトピックを扱う。	オムニバス
学部 共通 科目	人文・社会科学系 現代マーケティング論	マーケティングのねらいは、顧客を理解することで価値を生み出し、売り込みを行うことなしに商品・サービスが売れ続ける仕組みを作ることにある。本授業では、マーケティングの基本的な考え(誰に、何を、どのように提供すべきか)を理解することを通して、マーケティングに関する基本的な概念、理論、分析手法などの知識を修得するとともに、それらの知識を応用する能力を身につける。また、人間の認知システムとしてのブランドについて理解するとともに、デジタル化や持続可能性の維持が前提となった現代の社会において、ソーシャルイノベーションや市場創造の実現手段としてマーケティングがどのような役割を果たすかについて理解する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
科目	アート・デザインコミュニケーション	この授業は、多様化する現代の課題に対してアートやデザインという視点はどのように向き合っているのかについて、具体的な事例に触れながら、複雑化する社会的課題の解決にむけた柔軟な発想を身につける講義である。これからの世代を担う人類にとって、ますます複雑化し予測できない未来に対して、柔軟に発想していくことが重要である。そのため昨今では従来のロジカルシンキングに加え、デザイン思考やアート思考といった新しい思考法が注目され、従来のアートやデザインといった領域を超えて活かされている。本講義ではいかにしてアートやデザインの思考を形にしていけるかを実際に経験し、自らの創造的表現の技法を高めていくための土台となる講義である。 (オムニバス方式/全15回) 1～7回 (14 立花由美子/7回) アートコミュニケーションにおける事例研究 8～15回 (59 川原崎知洋/8回) コミュニケーションデザインにおける事例研究	オムニバス
自然科学系科目	暮らしの科学	日々の身の回りの物質、材料、機器、生物、植物等を科学的視点で見つめ直し、その基本原理を学修することで、科学技術や生命の知恵を実感する。特に理学・工学をベースとして生物、化学、物理の基礎知識を重視し、科学技術のリテラシーを身につけるためのきっかけにする。特に科学的視点で物事を捉えることの面白さを重要視し、専門性の高い講義への接続を促す。前半は、光や色に関する内容を生物学の視点と工学の視点から扱う。続いて、スマートフォンなどの機器やナノテクノロジーに関する産業応用の事例から学び、後半は呼吸によるエネルギーの獲得など、身近な生物学を学ぶ。 (オムニバス方式・一部共同/全15回) (2 下村勝・28 栗井光一郎/2回) (共同) ガイダンスおよびまとめ (2 下村勝/6回) 工学的見地から身の回りにおける科学と技術について担当する。 (28 栗井光一郎/7回) 生物学的見地から身の回りにおける科学と技術について担当する。	オムニバス 共同 (一部)
	スポーツ・健康科学	現代の競技志向型、健康志向型のスポーツ実践に向けた科学的成果について概論する。現代では競技志向でのスポーツは用具の開発がめざましくそれはあらゆる分野での研究が応用されていることに学生が気づき、その研究成果の一端を理解する。また、これらの競技志向型スポーツが健康づくりのためのスポーツ実践においても大きな影響力を示していることや健康志向のスポーツは競技とは異なる研究成果の基に実践されるべきものであることを修得する。これらのことを踏まえ、他分野との連携の重要性を学びコース専門科目の選択に導く。 (オムニバス方式・一部共同/全15回) (9 杉山康司・19 祝原豊/1回) (共同) ガイダンス (9 杉山康司/7回) ウィンタースポーツの用具とサイエンス、暑熱下での身体の変化、サマースポーツのサイエンス/栄養摂取とサプリメントの科学を知る/トレーニングの科学 (アスリート向け、中高年向け) /女性の健康とスポーツの問題点/遺伝とスポーツについて考える、スポーツウェア、シューズの科学/低圧環境下におけるスポーツ科学を探る (19 祝原豊/7回) 体力の評価1・2/発育発達段階でのスポーツ1・2/加齢と運動・健康/身体運動の機能解剖学/身体の生理機能	オムニバス 共同 (一部)
	人体の構造と機能	自身や他者の健康・安全の実現には、疾病予防だけでなく健全な状態の維持が重要となる。そのためには媒体となる身体の構造を理解する必要がある。身体はその環境を一定に保ち整えるために様々な機能を有しており、それぞれが緻密なネットワークを構築している。本講義では、その人体の構造の基礎を学びつつ、実践(運動と疾病)に関わる機能に着目して講義を展開し、人間の在り方を健康・運動・スポーツの観点から考察するためのリテラシーを身につける。	
	カーボンニュートラル科学	脱炭素経済・循環可能社会の実現に向けて、現存する課題を整理し、太陽光エネルギー、熱エネルギー等の利用と経済効果について多角的に学ぶ。再生可能エネルギーの利用、熱循環の基礎、バイオ燃料の利用等科学的見地から理解を深め、カーボンニュートラルに関する社会制度の知識を獲得することで、循環型社会の実現に向けて必要な学びを深める。 (オムニバス方式/全15回) (1 平井浩文/2回) バイオマス増産による二酸化炭素固定、リグノセルロースと微生物 (2 下村勝/8回) 総括、地球温暖化問題とエネルギー消費、物質循環の基礎化学、エネルギーの基礎化学、太陽光の利用、熱の利用、触媒による有機物の分解、産業におけるカーボンニュートラル (6 青木憲治/1回) セルロースとセルロースナノファイバー (14 水谷洋一/2回) 日本及び欧米諸国におけるカーボンニュートラル政策 (28 栗井光一郎/2回) 光合成、バイオ燃料	オムニバス

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通 科目	自然科学系科目	防災・減災論	<p>自然災害が発生するメカニズムと被害の特徴について基礎的な知識を習得し、事前の準備、緊急対応、復旧復興のサイクルにおけるハード・ソフトの防災・減災対策について学ぶ。自然災害および防災・減災に関わる課題を広く社会課題と関連づけて理解・考察する視点と手法を身につける。</p> <p>(オムニバス方式・一部共同/全15回) (⑦ 池田恵子・57 原田賢治/1回) (共同) 講義全体の導入など (⑦ 池田恵子/7回) 地域コミュニティと防災・減災/災害対応と被災者支援/福祉・多様性と防災・減災/ボランティア・市民社会と防災・減災/国際社会と防災・減災/災害からの復興と災害に強い地域づくり/まとめと討議(災害に強い社会とは、大学での学びと災害) (57 原田賢治/7回) 災害と防災・減災/災害過程/地震による災害と防災・減災/津波による災害と防災・減災/火山噴火による災害と防災・減災/台風・豪雨による災害と防災・減災/まとめと討議(静岡で発生する災害の理解、ハザードマップ、災害情報、わたしの避難計画)</p>	オムニバス 共同 (一部)
		生物多様性保全論	<p>人間の生活は深く自然環境と関わり合ってきており、自然の恵がなくては人間社会は成り立たない。現在、その自然環境が人間の社会活動によって大きく破壊され、とりわけそれを育んできた「生物多様性」が危機的状況に陥っている。本講義では、「生物多様性とはなにか」、「陸及び海洋の生態系と生物多様性」、「地球レベルでの物質循環と人間生活との関わり」、「人間社会と自然環境・生物多様性の関係性」、「生物多様性保全の取り組みと制度」を柱として概説し、持続可能な生物多様性の保全と自然環境の再生についての理解を深め、それに対する取り組み方を自ら考えていけるようになることを目指す。本講義は2名の教員で以下のように分担する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (24 小池 亨/10回) 生物多様性の概説, 及び陸の生態系, 保全への取り組みと制度に関する項目 (55 宗林 留美/5回) 海洋科学のグローバルな視点から、その生態系, 物質循環, 及び人間社会との関わりに関する項目</p>	オムニバス
		遺伝資源・知的所有権論	<p>遺伝資源は「遺伝の機能的な単位を有する植物、動物、微生物、その他に由来する素材のうち、現実の、又は潜在的な価値を持つもの」と定義されている。遺伝資源は潜在的な価値を有するため、遺伝資源(生物多様性)研究は、人類存続に大きく関わる。また、知的財産はイノベーションの源泉であり、知的財産戦略は産業や国の経済活動を左右する重要なファクターだと考えられている。本講義では、遺伝資源や知的財産権について、基礎知識を習得することを目的とする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (52 大西 由香/8回) 法令により定められた権利である知的財産権(特許権、実用新案権、商標権等)の制度概要やその活用方法 (53 一家 崇志/7回) 遺伝資源に関わる学術研究や遺伝資源へのアクセスと利益配分(ABS)について</p>	オムニバス
		都市計画論	<p>本科目では、近代の都市計画や現在の都市計画制度に関する基本的な知識を理解し、都市計画としての社会の要求を述べられることを目標とする。</p> <p>都市計画制度は、19世紀末から20世紀初頭に先進諸国において基本的な仕組みを確立した。都市計画を理解するには、先ず歴史的推移の中で都市と都市計画の関係を知ることが必要である。そして今日の都市や市街地の現況を学び、そこから単体の建築物の計画やそれら集団としての街づくりを進めるにあたっての課題を抽出し、その課題を解決するために都市計画上の方法の活用について知っておくことが必要である。この科目では、近代都市計画から現在の都市計画を踏まえて個別の建築物がどのように計画され、建設されているか都市計画上の方法(都市計画マスタープラン、用途・形態規制、市街地開発事業など)を中心に講義する。</p>	
		基礎生物学	<p>「生物学」は生命科学分野だけでなく、環境科学分野、そして人間社会そのものを考える上でも基本となる学問である。本講義は、生物学の基礎を学修し、身の回りの生物学・生命科学・環境科学のトピックスを正しく理解して説明できるようになり、かつ論理的に課題解決に取り組んでいける力を養っていくことを目的とする。本講義では、はじめに生物・生命現象の基本概念を学修する。次に、生物を構成する元素から生体高分子、細胞小器官、そして細胞までを体系的に学習した後、細胞における生命活動の仕組みを学修する。さらに、発生や免疫といった個体レベルでの生物学の基礎を学修し、最後に生物多様性や生態系といった生物群集の成り立ちと関わりを学修する。</p>	
		基礎化学	<p>化学の基礎を高校レベルから、本学部において必要となる化学について講義するとともに、身の回りの各種事象、例えば、花の色はどの様にして決まっているのか、あるいは、オゾン層はなぜ紫外線を吸収するのか、といった内容を化学と関連付けて論説することで、「活かした化学」を修得する。生物が産生する物質(天然物)を扱う有機化学の一分野を天然物化学と呼ぶが、植物、微生物が産生する天然物に着目し、その生物活性についても解説することを目的に、講義を行う。</p>	
		基礎物理学	<p>物理学は自然科学分野の基盤であり、現代科学技術の根幹をなす学問である。力学、波動、電磁気学、熱力学等の基本的な理解を通じて、身の回りに起こる様々な自然現象を定量的に記述できる能力を身につけることを第一の目的とする。また、これらの学修を通じて、現代社会で実用化されている様々な科学技術の原理を理解するとともに、合理的かつ批判的な思考方法を身につけることを第二の目的とする。講義を基本としつつも、受講者が机上で物理現象を理解するだけでなく、体感として物理現象を理解できるよう、実験を併用する。</p>	
		基礎地学	<p>我が国において最大の懸念の一つは、30年以内の発生確率が70-80%の南海トラフ巨大地震・津波である。また、県中部にはA級活断層の富士川河口断層帯があり、県東部には噴火の可能性のある富士山と伊豆東部火山群がある。さらに、静岡県は急峻な地形を有し、2021年には熱海で土砂災害が起きている。その上、地球温暖化で豪雨・高潮災害の発生頻度も上がると予想されている。これらの自然災害への対応は、地域社会の持続的発展にとって不可欠である。そこで、本講義では、自然災害に関する地学の内容を講義し、自然災害に関する基礎知識を修得することを目的とする。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
コース 専門科目	国際地域共生学研究Ⅰ	この授業は、国際地域共生学コースの入門ゼミナールである。国際社会や地域社会の課題とその解決に関して自らが主眼に置く研究課題に対して、それを解決するのに必要となる専門分野（研究室）を複数選択し、それぞれの分野における専門的知識、考え方、技術を習得し、課題解決に必要な専門分野（研究室）を決定する。 本学部に所属する教員の専門領域を理解した上で、自らが主眼に置く研究課題と深く関連する研究室（国際地域共生学コース：3研究室、他コース：2研究室）を選び、各2回ずつ研究を実施する。研究室選びについては、学びのアドバイザーと相談し、決定する。各研究を実施後、学びのアドバイザーとともに、立案した研究計画の見直し等を行い、卒業研究を行うための主及び副指導教員を決定する。	共同
	国際地域共生学研究Ⅱ	この授業は、国際地域共生学コースのゼミナールである。国際地域共生学研究Ⅰで決定した主及び副指導教員の専門分野の知識及び研究手法の深化を図り共創することで、卒業研究へと展開させる。 自らが主眼に置く研究課題を解決するために必要となる専門分野の文献を調査し、発表及び討論を経て研究計画を立案する。その研究計画に則って、主及び副指導教員の下で研究活動を行い、得られた結果について討論する。第10回目には中間発表を、第15回目には最終発表を行うことで、共創による課題解決能を育む。	共同
	国際地域共生学演習Ⅰ	この授業は、国際地域共生学コースのゼミナールである。国際地域共生学研究Ⅱで修得した研究技能と研究成果を土台に、自身の卒業研究のテーマに関する背景学習を行い、研究テーマを決定する。主指導教員の指導により卒業研究を推進する。 国際地域共生学コースの所属研究室にて、主指導教員とともに卒業論文のテーマを設定し、研究の背景に関する文献調査とその報告を行うとともに、主指導教員及び研究室のメンバーと議論を重ねることで、卒業研究の適切な計画を検討し、確定する。各自が作成した研究計画に基づき、研究を推進する。	共同
	国際地域共生学演習Ⅱ	この授業は、国際地域共生学コースのゼミナールである。卒業研究を完成させ、「共創」という手法を身につけるべく、国際地域共生学演習Ⅰの履修により主指導教員の指導で推進した研究に加え、副指導教員の指導の下で複眼的視点から研究を深化させ、研究成果をまとめる。 国際地域共生学演習Ⅰで主指導教員の指導の下で得られた研究成果を土台に、副指導教員の指導も得て、異なる専門領域の知見を用いて複眼的な視点から卒業研究を発展的に実施する。得られた研究成果を、主及び副指導教員、及び外部有識者と議論を重ねて、自身の研究成果を適切にまとめる。	共同
	グローバル協力論	この授業では、「グローバルな課題」が解決すべき問題として提起されてきた経緯、解決の政策アプローチと具体的な取組、および取組を行う主体の特徴と連携の課題について学ぶ。「発表と討論」の回（2回）では、より良いアプローチや連携の可能性について受講者各自が報告し合い討論を行う。 グローバル化がますます進展するなか、グローバルな課題の解決には、国家や国際機関が主体の国際協力の枠組をこえるアプローチが見られ、NPO/NGO、多国籍企業、社会企業、地方自治体、政治的文化的集団、個人など多様な人々が関与している。この授業では、グローバル課題の解決に関して理論的および実務的な知識を広く身に付けるとともに、それらを批判的に検討して、より良い協働を提起する力を習得することを旨とする。	
	国際移動論	近年、越境する人々が増え、移民送出国も受入国も大きな変貌を遂げている。今や国内情勢だけを見ていけば良い時代ではないと言っても過言ではない。例えば教育現場では、今まで均一とされてきた日本の学校文化に文化的背景の異なる児童・生徒が進学、編入し、異文化に対応できる人材が求められている。国際移動がもたらす様々な社会変動を理解するために、本講義では時間軸を超えた人々の国際移動の動向を体系的に学び、「国内外地域社会」の現状を考える。	
	エスニシティ論	この授業では、日本語で「民族性」や「民族らしさ」とも表現される「エスニシティ」の基礎知識を理解するとともに、エスニシティという視点を通して、グローバル社会や地域社会の現状やその関係性などを理解するための視点と手法について学修する。この授業は、大きく3つのパートで構成される。 （第1回～第4回）人種・国民・民族の概念との比較検討を行いながら、エスニシティの概念について理論的に学修する。 （第5回～第9回）私たちの日常生活や民族紛争、観光、文化の所有権をめぐる問題など、具体的な事例を取り上げて、現代社会におけるエスニシティの動向や意味について学修する。 （第10回～15回）エスニシティについて、先住民をめぐる動向に焦点をあてて学修する。とくに、先住民をめぐる国際言説と地域社会の関係性に注目することで、エスニシティの問題を俯瞰的・微視的にとらえて考える手法を身につける。	
	観光振興論	本授業では地域における観光振興の意義と実態について論じる。少子高齢化や社会インフラ等の課題を抱える地域において、観光は産業でありながら地域の自然や伝統文化を再評価し保全する仕掛けでもあり、地域振興としての意義を有する。本授業では静岡県内のDMO（観光地域づくり法人）や観光アクターと連携したリレー形式の講座により観光政策やマネジメント、データ解析による地域分析、観光ガイドの実態などを包括的に論じる。観光を通じた持続可能な社会づくりに必須の知見と視点を提供する。	共同
比較文化から見る法	文化の相違は異なる法律システムをもたらすことになる。本講義は、日中の伝統文化間の違いなどを踏まえつつ、民事法制を中心に具体例を取り上げながら、制度上の異同を解析する。こうした詳細な説明を行うことを通じて、本講義履修生の国際的涵養および複眼的な思考力を高めることを目標とする。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
コース専門科目 国際地域共生学 コース専門科目	国際・地域の安全と法	国際社会および地域社会にまつわる様々な課題の中で、安全の問題は大きな関心事項の1つである。本科目では、安全保障という概念枠組みを利用した国際社会における安全の問題と、地域の安全を図るための諸施策および犯罪（とりわけ再犯）問題への対応を軸とした地域社会の安全に向けた取組みとその課題を素材として、法的観点に基づいた学びを進めていく。 (オムニバス方式・一部共同/全8回) (10 正木祐史・⑧ 板倉美奈子/2回) (共同) ①イントロダクション、⑧まとめ (10 正木担当/3回) ⑤地域の安全にかかわる施策の概要、⑥「安全・安心なまちづくり」について、⑦犯罪行為者の社会内処遇・再犯防止と地域社会 (⑧ 板倉美奈子/3回) ②国連による安全保障、③国家の安全保障から人間の安全保障へ、④新たな安全保障概念－経済安全保障、食料安全保障、サイバーセキュリティなど	オムニバス共同 (一部)
	社会的排除とソーシャルインクルージョン	現在、国際社会において地域福祉の充実が求められている。日本国内では、2018年から改正社会福祉法に基づき、「地域共生社会」「我が事、丸ごと」の必要性が叫ばれている。特に、地域社会は少子高齢化がますます進み、「消滅可能性」すら叫ばれ基礎体力が損なわれている。しかし、私たちの住む生活圏を軸とした地域の主体性への期待値は高い。そのような困難の中で、地域福祉はどのように組み立てられるのか。国際的なソーシャルワーク（社会変革・社会開発・社会結束＋相談援助）の源流「セツルメント」にまで遡りながら、社会的排除のメカニズムとソーシャルインクルージョンの思想・実践・制度との関係性を、具体的な事例から構想していく。	隔年
	国際地域ケーススタディ	この授業では、社会課題やグローバルな課題の原因や構造、その解決のための取組について、具体的な国・地域の文脈に位置づけて情報収集を行って考察し、より良い課題解決を構想するための事例研究を行う。特定の地域において生じている課題をマクロとミクロの両方の視点および多様なステークホルダーの視点から複合的に検討し、既に習得している調査手法や数理データサイエンスのスキルを実践して具体的な地域の課題の考察に応用できるようになることを目的とする。 履修者と担当教員はチームに分かれ、チームごとに事例を設定して、探究活動を行い、その結果を報告する。	共同
	国際福祉社会論	この授業では、福祉を個人の問題としてではなく、社会的な問題（社会的リスク）として捉える。主に先進国を対象として、失業、病気、貧困、育児・介護など一人ひとりが生きてゆく上で経験する問題を、一個人を超えた制度によってどのように解決しようとしているのか（社会的リスク管理）を学ぶ。 社会が変化するにしたがって課題は変化し、解決方法も変化する。そのため、まず第二次世界大戦後の福祉国家による社会的リスク管理を学ぶ。その上で、特に1990年代以降のグローバル化の進展以降の社会的な問題とその解決のための試みを学ぶ。それにより現代社会の複雑な課題に取り組み、今後の持続可能な社会を構想する視点を獲得。	
	住居計画	住居と建築計画に関する専門知識とそれらを応用する能力を身につけることを目標とする。住居は人々のあらゆる生活行為の拠点であり、最も身近で基礎的な建築である。そして地域や時代および居住者の住思潮や生活文化を形成する。住居計画では住居の成立に関わる基礎的な知識を習得し、人々の生活と住空間との関係について解説し、現代の住居と住み方の特質と計画上の課題について講義を行う。具体的には、住居の歴史、住宅の計画、住宅の設計、集合住宅や住宅政策、まちなか居住について講義を行う。	
	防災まちづくり	地域コミュニティの防災活動や行政による災害への事前対策について概要を学ぶ。その後、履修者が静岡市内の地域コミュニティにおける自主防災活動の見学と担い手へのインタビューを企画・実施し、その結果を考察、発表する。見学・インタビューの前と後に、防災まちづくりの課題、展望と可能性を検討する討論を実施する。 災害に対する地域・人々の脆弱性について、地域社会の実態に即して多様な側面から理解し、多様な主体と連携してその克服を検討・構想する手法を習得することが目標である。	
	ジェンダー・セクシュアリティスタディーズ	ジェンダーやセクシュアリティは、その人の生き方に大きく関わっている。今日、どのようなジェンダーやセクシュアリティであっても平等であるといわれる一方で、社会は異性愛や男女二元論が前提となっており、「男女役割分業意識」も根強く、女性や性的マイノリティをとりまく状況は、解決すべき主な人権課題である。そこで、この科目では主に、①ジェンダーやセクシュアリティに関する知識の習得、今日に至るまでの社会構造や制度の特徴と問題点、②教科書やメディア等に見るジェンダーやセクシュアリティの表現の検討、③日常にひそむ差別や不平等の認知、影響、対応に関わる内容についてとりあつかう。文献講読やメディア表現の検討を通じて、主に歴史的、教育的、制度的、哲学的な視角から今日の社会構造の特徴や問題を認識すると同時に、自らの無意識の偏見や自らが有する「特権」と向き合い、これからの社会について具体的に展望できることをめざす。	
	表象・メディア・文化	現代における文化は、文学、美術、音楽、パフォーマンス・アーツ、映画など様々なメディアによって構成されている。この授業では、こうした多様な文化を、「表象」というキーワードによって分野横断的に論じる手法を学ぶ。具体的には、一つのテーマを定めながら、時代、地域、ジャンル様々な文化事象を取り上げ、研究・批評の行為そのものを実演してゆく。最終的には、履修者が、各々の興味・関心に基づき、同様の手法による研究・批評を自身で実践できるようになることを目指す。	
視覚芸術論	この授業は、美術史・芸術学・美学を俯瞰する概論形式の講義である。先行するアートコミュニケーション等の授業により培った「アートによるものの見方」が、先史から現代にいたるまで、歴史的にどのように展開し、今日に至るのかを、講義形式で学ぶ。また授業課題とそれに先立つガイダンスにより、芸術学における論理展開など、卒業研究等で芸術学を選択する学生にとって必要な基本的なアカデミックスキルについても学ぶ。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
コース 専門科目	国際地域共生学コース 専門科目	芸術と教育	「芸術と教育」「美的教育」について思想的・歴史的に考察することを通じて、美的教育の観点から学び・教育・発達を捉え直していく。また、情報化社会や人工知能といった現代的な課題として、「遊び」「遊戯」について理解を深める。あわせて、プレゼンテーションについて資料作成・技法・実践の観点から、美的教育の実践を検討する。以上を通じて、美的教育の理論と実践に対応できる能力を養う。	
		ミュージアム・スタディーズ	この授業は、博物館学を俯瞰する概論形式の講義である。果てしない知の集積場である博物館は、学校教育とは異なる体系の学びを提供する社会的に重要な機関である。特に近年では芸術に触れることの重要性が議論され、美術館の社会的重要性が高まっており、ますますミュージアムの可能性が見出される中、ミュージアムの様々な可能性について論じる講義である。自らの学びと、ミュージアムという社会的装置をどのような接点で見出せるか、自らが探求するための土台となる講義である。	
	生命圏循環共生学コース 専門科目	生命圏循環共生学研究Ⅰ	この授業は、生命圏循環共生学コースの入門ゼミナールである。国際社会や地域社会の課題とその解決に関して自らが主眼に置く研究課題に対して、それを解決するのに必要となる専門分野（研究室）を複数選択し、それぞれの分野における専門的知識、考え方、技術を習得し、課題解決に必要な専門分野（研究室）を決定する。 本学部に所属する教員の専門領域を理解した上で、自らが主眼に置く研究課題と深く関連する研究室（生命圏循環共生学コース：3研究室、他コース：2研究室）を選び、各2回ずつ研究を実施する。研究室選びについては、学びのアドバイザーと相談し、決定する。各研究を実施後、学びのアドバイザーとともに、立案した研究計画の見直し等を行い、卒業研究を行うための主及び副指導教員を決定する。	共同
		生命圏循環共生学研究Ⅱ	この授業は、生命圏循環共生学コースのゼミナールである。生命圏循環共生学研究Ⅰで決定した主及び副指導教員の専門分野の知識及び研究手法の深化を図り共創することで、卒業研究へと展開させる。 自らが主眼に置く研究課題を解決するために必要となる専門分野の文献を調査し、発表及び討論を経て研究計画を立案する。その研究計画に則って、主及び副指導教員の下で研究活動を行い、得られた結果について討論する。第10回目には中間発表を、第15回目には最終発表を行うことで、共創による課題解決能を育む。	共同
		生命圏循環共生学演習Ⅰ	この授業は、生命圏循環共生学コースのゼミナールである。生命圏循環共生学研究Ⅱで修得した研究技能と研究成果を土台に、自身の卒業研究のテーマに関する背景学習を行い、研究テーマを決定する。主指導教員の指導により卒業研究を推進する。 生命圏循環共生学コースの所属研究室にて、主指導教員とともに卒業論文のテーマを設定し、研究の背景に関する文献調査とその報告を行うとともに、主指導教員及び研究室のメンバーと議論を重ねることで、卒業研究の適切な計画を検討し、確定する。各自が作成した研究計画に基づき、研究を推進する。	共同
		生命圏循環共生学演習Ⅱ	この授業は、生命圏循環共生学コースのゼミナールである。卒業研究を完成させ、「共創」という手法を身につけるべく、生命圏循環共生学演習Ⅰの履修により主指導教員の指導で推進した研究に加え、副指導教員の指導の下で複眼的視点から研究を深化させ、研究成果をまとめる。 生命圏循環共生学演習Ⅰで主指導教員の指導の下で得られた研究成果を土台に、副指導教員の指導も得て、異なる専門領域の知見を用いて複眼的な視点から卒業研究を発展的に実施する。得られた研究成果を、主及び副指導教員、及び外部有識者と議論を重ねて、自身の研究成果を適切にまとめる。	共同
		環境再生科学	地球温暖化、オゾン層破壊、生態系破壊、公害を含む環境汚染等、人類は生活を豊かにするために様々な技術を開発し、その過程で様々な化学物質を生産し、環境中に放出してきた。これらの蓄積により上記問題が起こった訳だが、本講義では、上記の環境問題を科学的に論じ、どの様な社会的背景で起こり、どの様なメカニズムで環境を破壊してきたのかを理解し、その上で、環境を再生するにはどうしたら良いか、科学的知見、社会的視点、法律からの視点を交えて講義するとともに、サステナブルな地球環境構築に向けた方策を議論する。	
		安全管理	自然科学研究を進めるにあたって、実験は重要である。しかし、基本的な知識を持たずに実験を行うことは非常に危険であり、不注意な事故を起こさないために守るべき注意事項がある。本講義では、実験を行うにあたって必要な基礎知識を概説し、事例ごとになぜそのような注意が必要かを解説する。そこから、該当する安全対策が必要である理由を理解し、実験を安全に行う知識を身につける。	
		資源循環化学	脱炭素社会の実現のためには、エネルギー、材料、システム関連のイノベーションを興さなければならない。そのためには、国内外の現状や社会動向を理解し、何がより良いかを考える力を養う必要がある。本講義では、サーキュラーエコノミー、バイオエコノミー等、環境と経済の両面から学ぶ。	
		材料科学	2050年に向けたCO2排出削減目標の達成には、材料分野ではカーボンニュートラルであるバイオマスの活用やリサイクルを前提とした材料設計が必要である。そのためには材料開発の課題、原料コストの問題、リサイクルにおける回収システム、分別・識別精度の課題等様々な課題を克服していく必要がある。本講義では、工業応用範囲の広い、電子材料とプラスチック材料に着目し、原理から応用に至る知識を獲得する。 (オムニバス方式/全15回) (② 下村 勝/7回) 結晶材料とは、結晶学の基礎、結晶の評価方法、化学結合と電子バンド、光吸収と発光、欠陥・転位・粒界とは、固体表面の化学反応について説明する。 (⑥ 青木憲治/8回) ガイダンス、材料科学の視点から考えるバイオエコノミー、サーキュラーエコノミー、バイオマス活用の意義、プラスチックの種類と特長、用途、複合材料とは、再生材活用（自動車、家電、容器・包装）の取り組みと課題、バイオマスを利用した複合材料について説明する。	オムニバス
	環境共生社会論	環境問題の発生と拡大および解決について事例に関する環境社会学的な分析に関するレクチャーから、人間と自然の関係性の再生、自然をめぐる社会的関係の再生の2つの観点についての環境学的知見を深める。その知見をもとに環境と共生する社会を実現するために試みられているアイデアの基礎を理解する。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
コース専門科目 生命圏循環共生学 コース専門科目	自然災害の現象	地球システムの活動として自然環境が変動することにより発生する、自然災害の科学的メカニズムを理解する。地震、津波、台風、高潮、豪雨、土石流、地滑り、気候変動などの地球上で発生する自然現象のメカニズムやその特徴について理解する。さらに、これらの自然現象が人間社会への脅威としてどのような影響を我々の社会にもたらすのかについて、過去の災害事例やリスク評価の成果などを参考に、自然災害の現象として具体的理解を深める。	
	森林水文学	本講義の目標は、森林流域の水循環過程における理論と定量的な評価法を学び、水源涵養・二酸化炭素吸収・斜面崩壊の防止など森林が有する様々な公益的機能がいかんして発揮されるかを理解することである。本科目では森林流域における水循環の主要な構成要素である降雨・蒸発散・地中での水の移動・河川流出について、理論・定量的な評価法を学ぶ。 (オムニバス方式/全15回) (17 今泉文寿/3回) 水文過程と災害のつながりや流域管理手法について学ぶ (88 江草智弘/12回) 森林の成長が炭素収支に与える影響や森林施業が河川流出量に与える影響などを学ぶ	オムニバス
	環境と経済	環境と経済・経営にかかわる諸概念について、5つのテーマ(環境問題と市場経済/環境税の理論と政策/拡大生産者責任の理論と政策/環境の経済的評価と生態系サービスへの支払い/企業の経営戦略とCSV)から学ぶことにより、これらを的確に説明でき、諸課題を多面的・論理的に考察し、その本質を理解する。	
	遺伝と進化	生物は親から子へと遺伝情報が受け継がれることにより、「種」としての特徴を保持することができる。一方、生物は不変でなく、すべての種は進化し続ける。この、一見矛盾するような生物の本質を大局的に理解することが、本講義の到達点である。本講義では遺伝の仕組み、遺伝子の構造、遺伝子の働き、遺伝子情報等を用いた各種情報解析、ゲノム、進化についての知識を身に着けることを目的とする。	
	分析化学	自然科学は測定した結果に基づいて議論が展開され、測定を抜きにしては成り立たない。分析化学は、広い意味では薬学、医学、農学、工学、理学など、狭い意味では有機化学、無機化学、生化学、生薬学、環境学、天然物化学など、あらゆる学問の基礎となる。本授業では環境中や生体中の成分から「質」を知るための定性分析と「量」を知るための定量分析に必要な各種機器分析法の基本的な原理や方法を修得する。	
	農村・森林の環境と法	本講義では、農村・森林のモノの生産、環境保全、コミュニティの活性化といった多面的な機能に着目し、農村・森林の環境・生物多様性の維持・保全や農産物・林産物の国際貿易など経済活動に関する国際条約・国内法などの考察やこれまでの議論動向を知ることを通じて、農村・森林の3つの持続可能性(環境の持続可能性、経済の持続可能性、社会の持続可能性)について多角的かつ包括的な理解ができるようになることを目標とする。前半では、一次産品貿易と経済のグローバル化・環境との両立に関わる問題、食・農をめぐる問題を法的観点から取り上げる。後半では、森林の環境に関わる問題や森林認証制度、ABS制度など森林資源の保全と持続可能な利用に関わる国際・国内の法制を概観する。これらの考察を通じて、人権・公正などにも配慮しつつ、農村・森林の環境保全と持続可能な利用をどのようにして両立させ、農村・森林の持続可能性を維持していくのかについて考える。	
	環境工学	環境工学の代表的なアウトプットとして知られる上水道システムや下水道システムをはじめとする社会インフラは、自然のもつ自浄作用を補完することで、今日の衛生的な都市空間を支えている。本講義は、快適な都市環境を支えるそれら社会インフラを計画・設計・維持するために必要とされ、また広範な学問分野を横断的に扱うことから全体を捉えにくい環境工学について、その基礎を理解することを目的とする。さらに地域規模の環境を維持するために不可欠とされる、これら社会インフラが地球規模の環境に対しては負の影響を及ぼすこともある点について理解することを目的とする。	
	バイオテクノロジー	バイオテクノロジーとは、バイオロジーである生物学とテクノロジーである技術の合成語である。生物の持つ性質や能力を人の生活に利用し、食糧生産、環境改善、エネルギー生産、医療や健康促進に役立てる学問である。古くは、酒や味噌などの発酵や品種改良もバイオテクノロジーの1つと言える。近年、人口爆発による食料・環境問題解決や、バイオエネルギー生産などにバイオテクノロジーは大きく関わっているため、それぞれの問題とともに具体的な解決策について学び、問題解決能力を身に付けることを目的としている。	
	技術者倫理	技術が社会と環境に与える影響度合いを判断できる能力を養い、技術者が担う責任について理解できることを授業目標とする。科学技術者に問われている倫理とは何かについて概説し、「個人倫理」、「職業倫理」、「環境倫理」、「情報倫理」について、技術者が責任を負う理由、技術者が重視すべき価値、倫理的問題解決の方法などを学ぶ。また、具体的な事例として「研究を行う上での倫理(研究倫理)」、「企業のコンプライアンスの必要性」、「土木・建築分野における法規の遵守」などについて学ぶ。	
環境微生物学	微生物には多様な物質の変換・代謝能力があり、地球上の様々な物質の循環や環境問題に関与している。このような微生物の能力について、その生化学的反応から生態学的な特徴までを学び、農業の生産性向上や環境問題の解決を考えていくための基礎的知識を習得する。 (オムニバス方式/全15回) (22 鮫島玲子/5回) 地球規模の環境問題への微生物の関与について、物質循環の観点から学ぶ。また、食料生産現場である農地の土壌や植物に生息する微生物について学び、環境負荷が小さく持続可能で生産性の高い農業に役立つ微生物の利用について考える。肉眼で見ることのできない微生物の存在や活動を環境中で検出する方法についても学ぶ。 (19 小川直人/10回) 芳香族塩素化合物等を分解する微生物の能力、及び環境中の微生物の様々な応答現象(栄養分、密度等)、微生物遺伝子の水平伝播について、その生化学的・分子生物学的機構を学び、微生物の能力を環境問題の解決に生かしていくための基礎的知識を習得する。	オムニバス	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
コース 専門科目	総合人間科学研究Ⅰ	この授業は、総合人間科学コースの入門ゼミナールである。国際社会や地域社会の課題とその解決に関して自らが主眼に置く研究課題に対して、それを解決するのに必要となる専門分野（研究室）を複数選択し、それぞれの分野における専門的知識、考え方、技術を習得し、課題解決に必要なとなる専門分野（研究室）を決定する。 本学部に所属する教員の専門領域を理解した上で、自らが主眼に置く研究課題と深く関連する研究室（総合人間科学コース：3研究室、他コース：2研究室）を選び、各2回ずつ研究を実施する。研究室選びについては、学びのアドバイザーと相談し、決定する。各研究を実施後、学びのアドバイザーとともに、立案した研究計画の見直し等を行い、卒業研究を行うための主及び副指導教員を決定する。	共同
	総合人間科学研究Ⅱ	この授業は、総合人間科学コースのゼミナールである。総合人間科学研究Ⅰで決定した主及び副指導教員の専門分野の知識及び研究手法の深化を図り共創することで、卒業研究へと展開させる。 自らが主眼に置く研究課題を解決するために必要となる専門分野の文献を調査し、発表及び討論を経て研究計画を立案する。その研究計画に則って、主及び副指導教員の下で研究活動を行い、得られた結果について討論する。第10回目には中間発表を、第15回目には最終発表を行うことで、共創による課題解決能を育む。	共同
	総合人間科学演習Ⅰ	この授業は、総合人間科学コースのゼミナールである。総合人間科学研究Ⅱで修得した研究技能と研究成果を土台に、自身の卒業研究のテーマに関する背景学習を行い、研究テーマを決定する。主指導教員の指導により卒業研究を推進する。 総合人間科学コースの所属研究室にて、主指導教員とともに卒業論文のテーマを設定し、研究の背景に関する文献調査とその報告を行うとともに、主指導教員及び研究室のメンバーと議論を重ねることで、卒業研究の適切な計画を検討し、確定する。各自が作成した研究計画に基づき、研究を推進する。	共同
	総合人間科学演習Ⅱ	この授業は、総合人間科学コースのゼミナールである。卒業研究を完成させ、「共創」という手法を身につけるべく、総合人間科学演習Ⅰの履修により主指導教員の指導で推進した研究に加え、副指導教員の指導の下で複眼的視点から研究を深化させ、研究成果をまとめる。総合人間科学演習Ⅰで主指導教員の指導の下で得られた研究成果を土台に、副指導教員の指導も得て、異なる専門領域の知見を用いて複眼的な視点から卒業研究を発展的に実施する。得られた研究成果を、主及び副指導教員、及び外部有識者と議論を重ねて、自身の研究成果を適切にまとめる。	共同
	発達心理学	本授業は、講義形式の科目である。乳幼児期、児童期、青年期における心身の発達過程や、発達の特徴を理解することを目的とする。文化や地域の中で子育てや教育が行われ、子どもは育っていく。そのため、環境と発達の相互作用まで視野に入れながら発達を捉えていく。具体的なキーワードとしては、乳幼児期の身体の発達と社会性の獲得の関係、乳幼児期から児童期にかけての認知発達の過程、青年期の自己の獲得過程、発達障害をテーマとして深めていく。幼稚園・保育園・子ども園、子育て支援センター、学校、児童相談所などの外部機関について理解しながら、発達を取り囲む環境についても関心を深めていく。	
	知覚・認知心理学	人間の知的な活動を情報処理モデルの観点から理解することを目標とした心理学の分野を認知心理学という。本授業では、人間の知覚、認知、さらには行動について認知心理学的観点から分析的、統合的に考えられるようになることを目指す。授業では講義形式で、人が環境からの刺激や状況を情報として取り入れるのかという知覚の仕組み、人が知覚された情報を用いて記憶や思考といった情報処理をどのように行っているのかについて学ぶ。最終的に人間の知的な行動を情報処理モデルの観点から情報処理の仕組みとして理解し、説明できるようになることを目標とする。	
	デザイン心理学	日常生活における人間の活動では様々なモノ・サービスといった人工物が利用されている。人工物のユーザビリティの低さは人間の活動を阻害してしまう。人間と人工物との共生を目指す社会においては、人工物のユーザビリティのメカニズムの解明、向上が求められる。人工物の使いやすさに関わる研究は、認知心理学の一領域の認知工学で研究が進められ、知見が積み上げられている。本授業では、講義形式で、認知心理学、認知工学の観点から人間の身体・生理的、認知的特性と人工物の使いやすさの関係、人と人工物・環境の相互作用がどのように使いやすさに影響を与えるのかを学ぶ。また、近年、デザインで注目されているユニバーサルデザイン、人間中心設計について学び、認知心理学、認知工学の観点から使いやすい人工物を設計する観点、必要性について理解できるようになる。	
	社会・集団・家族心理学	「社会・集団・家族心理学」講義では、人の心理と行動と社会との関係を探求してきた研究の成果を概観する。（１）対人関係並びに集団における人の意識及び行動についての心の過程、（２）人の態度及び行動についてのさまざまな理論、（３）家族、集団及び文化が個人に及ぼす影響についての知識を受講生が得ることを目指すと同時に、受講生がその知識をもとに受講生自身の周囲で起きている出来事を理解し、その理解を他者に伝えることができるようになることを目指す。本講義で身につけたことを土台に、人々が共に安心して生活し続けていくことができる社会関係（対人関係、家族関係、集団間関係、個人と社会規範や社会制度との関係、自分との関係など）のあり方について、受講生が自分なりの考えを拡げ深めることができるようになることを展望した講義である。	
	身体・認知情報システム論	本演習では、心理学、認知科学の実験課題を実践的に行い、心理学、認知科学における諸理論に沿って実験結果の考察を行う。心理学、認知科学における諸理論の体験的な理解を通じて、人間の身体・認知情報システムとしての特性、メカニズム、機能について知識を獲得し、また、新たな仮説や問題を設定する能力を身につける。	
	情報通信技術論	昨今、情報通信技術の発展に伴いさまざまな社会変化が起きている。通信網の拡大により動画やビッグデータの低遅延送信、AI技術を用いたインテリジェントな市場サービスの登場などが1例である。本科目は、これら情報社会を支える情報通信技術の仕組みの概念および、実サービスへの実装事例などの技術的側面を講義形式で学ぶ。具体的な教材はインターネット関連技術とする。これらの仕組みや技術内容を理解することで応用利用可能な技術を得ることを目標とする。	
情報通信技術演習	昨今、情報通信技術の発展に伴いさまざまな社会変化が起きている。通信網の拡大により動画やビッグデータの低遅延送信、AI技術を用いたインテリジェントな市場サービスの登場などが1例である。本科目は、「情報通信技術論」で学んだ各情報通信技術を演習形式でプログラミングする。具体的内容は、OSI参照モデル第4層TCP/IPでのプログラミングを基礎技術として、第7層HTTPを用いたWebシステムを開発する。これらを通じて基礎的なネットワークプログラミングを理解することを目標とする。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
コース 専門科目	総合人間科学 コース 専門科目		
	健康・医療心理学	疾病・障害に関連し、①ストレスと心身の疾病、②医療現場における心理社会的課題と支援、③保健活動の現場における心理社会的課題と支援、④災害時等に必要な心理支援、等の実践的な事例を取り上げ、問題解決のために必要な知識と方法について理解を深めていく。	
	コミュニティ心理学	心理学的支援を必要とする人たちはどのような体験をしているのか、またその問題となる事象が生起する背景にはどのような社会的文脈があるのか、そしてなぜ問題は継続しているのか。個人・家族・集団・組織・コミュニティにおける事例を中心に検討し、問題解決のために必要な発想と方法を深めていく。	
	運動生理学	スポーツ指導者、スポーツ・健康推進者として身体に関する仕組みや働きについて学ぶ。特に講義で取り上げた専門的キーワードについて理解し、より高い専門性を身につけながら、総合的人間科学分野の課題解決能力につなぐ思考力や連携実践力の基礎を学ぶ。また、講義で扱う骨格系、神経系、消化器系、内分泌系、筋系について運動学的な観点と結びつけスポーツ活動における呼吸循環機能の働き、筋組成、運動神経と脳、環境やトレーニングによる生理学的適応現象を解説できる能力を身につけ国際的コミュニケーション力に活用できるようにする。	
	身体機能のメカニズムと計測	健康や運動に関わる身体機能について理解を深める。また、年齢や性別、それぞれのステージや目的に応じた身体活動に重要な体力要素のうち、行動体力の指標に着目し、その概念や具体的測定方法を身につける。授業では、測定の実践に加えて、得られた結果を用いて基本的な評価法を理解し、各領域で活用するための実践力を蓄積する。	
	スポーツ経営学	公営・私企業にわたるスポーツ事業の企画・立案方法について理論的に解題する内容である。スポーツ経営学が「豊かなスポーツライフの成立・維持・発展」のために在ることを重要視するため、まずは、国民（市民）のスポーツ生活論について理解を図る。これをスポーツ経営の「目的論」とし、この理論的背景に準じて、スポーツ経営の「事業論」「組織論」「経営資源論」「環境適合論」を展開する。具体的には、学校体育経営、地域スポーツ経営、プロスポーツ経営を事例としながら、これらの協働・共生の経営論について議論を深めていく。	
	スポーツ心理学	本講義では、スポーツ心理学の基礎的考え方を、理論と実践の両面から理解するとともに、それらをスポーツ指導やスポーツ実践に有効に活用できる基礎を身につけることを目指す。まずスポーツ科学における心理学の位置づけを把握した後、スポーツ心理学の基礎的概念である、動機付け（やる気）、緊張、自信（自己効力感）、運動学習、状況判断とそれらに影響する要因についての理解を深める。さらに、実践的な技術のあるメンタルマネジメントや心理的問題への介入技法について、その基礎的なスキルを学ぶ。さらに近年重視される傾向が強まっている健康スポーツや生涯スポーツにおけるスポーツの心理的影響や派生する心理学的課題についても知見を深める。	
	コーチング学	コーチングとは、選手・チームとの間に良好な関係を築きながら、望ましい結果を導くためにコーチがとる行動および思考の総称である。本授業では、まず、コーチの果たすべき主な機能や役割について学修する。その後、スポーツの実践の場で生じる様々な問題を合理的に解決し、選手・チームの未来を創造していくための方法について理解を図る。具体的には、「競技力論」、「トレーニング論」、「試合論」、「マネジメント論」等を展開し、現場での具体的な事例とともに議論を深めていく。	
	スポーツの理論と実践 I	スポーツ活動は常に理論的背景を基に発展してきていることを実践を通して学ぶ。このスポーツと実践Iでは特に健康思考スポーツを題材にスポーツの楽しさの背景にある理論とサイエンスや正しい指導法と準備を実技を通して学ぶ。取り上げるスポーツとしては一般にニュースポーツとして知られている個人型スポーツであるペタンク、ウォーキング、ブローライフル、ゲーム型スポーツであるユニバーサルホッケー、ディスクゲームなどである。 (オムニバス方式・一部共同/全15回) (9 杉山康司・19 祝原豊/1回) (共同) 新しいスポーツへの挑戦 (9 杉山康司・19 祝原豊・⑩ 村田真一・23 平嶋裕輔/1回) (共同) ニュースポーツを改善するテーマディスカッションと実践 (9 杉山康司・23 平嶋裕輔/1回) (共同) アダプテッド対人系ゲーム ブラインドフットサル (19 祝原豊・⑩ 村田真一/1回) (共同) ネットスポーツ バルンバレーボール (⑩ 村田真一・23 平嶋裕輔/1回) (共同) アダプテッド対人系ゲーム シットティングバレー (9 杉山康司/6回) 健康志向スポーツとは/ユニバーサルホッケー/健康ウォーキング/ノルディックウォーキング/ブローライフル/ブローバイアスロン (19 祝原豊/4回) ターゲットバードゴルフ/ペタンク/アルティメット/ディスクゴルフ	オムニバス 共同 (一部)
スポーツの理論と実践 II	スポーツ実技の中でも、学校体育から市民スポーツおよびプロスポーツまで亘っている「ゴール型球技」を取り扱い、その実践能力はもとより、戦略・戦術の理解、指導計画の立案方法、大会運営計画の在り方、ゲームの見方などを総合的に学習する。具体的には、「バスケットボール」「サッカー」「ハンドボール」の3種目を扱う。 (オムニバス方式・一部共同/全15回) (9 杉山康司・19 祝原豊/4回) (共同) バスケットボールに関する戦略・戦術について解説し、それを実現するための計画法の理解と実技能力の向上を図る。 (⑩ 村田真一・24 平嶋裕輔/1回) (共同) ゴール型球技の進化とプレイヤーの在り方についてまとめる。 (⑩ 村田真一/4回) ハンドボールに関する戦略・戦術について解説し、それを実現するための計画法の理解と実技能力の向上を図る。 (24 平嶋裕輔/6回) ゴール型球技に共通する見方・考え方を提示し、その中に構成される「球技の構造論」について理解を促す。また、サッカーに関する戦略・戦術について解説し、それを実現するための計画法の理解と実技能力の向上を図る。	オムニバス 共同 (一部)	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
コース 専門科目	総合 人間科学 コース 専門科目	人間科学の課題と法	近時の科学技術の発展にはめざましいものがあり、それに伴い、これまでに経験したことがないような法的問題が発生している。本講義では、担当者の専門である刑法の観点から、人間科学の課題と法について講義を行っていくことにする。具体的には、①治療行為と刑法、②生命の発生と刑法、③終末期医療と刑法、④精神医療と刑法、⑤性と刑法、⑥情報社会と刑法、⑦AIと刑事責任能力などをテーマに法律や刑法の初心者にも分かりやすいように講義を行い、人間科学の課題と法について、理解を深めていくことにする。	
	人間行動科学と刑事政策	刑事政策（犯罪学・刑事学）は、犯罪と刑罰に対する経験科学的な認識とこれに対する合理的な対策の提言を目指す刑事法の一分野である。犯罪の原因もその対策も、人間の行動に対する理解に基づき分析される。犯罪原因論については、因果論的発想に立ったうえで個人的資質に着目する見解や因果的で社会構造に着目した見解、犯罪者というラベルを貼る行為と貼られた行為者の相互作用として犯罪を捉える見解などが古典的な見解であるが、個人の行動と社会からのアプローチのどこにどのように着目するかによってその違いが出てくる。また、犯罪の対策についても、犯罪行為者個人へのアプローチや社会（構造）に対するアプローチなど多様な方向性がある。本科目は、刑事政策における犯罪の原因論・対策論を素材として、そこに人間行動科学や人間把握がどのように現れてきたか・現れているかを概観することにより、人間理解や人間把握の視点の獲得を目指すものである。		
	ウェルビーイングの哲学	ウェルビーイングは、さまざまな文脈において、到達されるべき人間の〈よい状態〉として語られる。しかし、人間の〈よい状態〉がどのようなものであるのかをめぐっては、さまざまな議論が行われてきた。この講義では、人間の〈よい状態〉をめぐるとの議論を、哲学における幸福論や、「人間の尊厳」の議論を用いながら解説する。		
	生命・医療倫理学	生命・医療倫理学は、がんの告知、終末期医療、生殖補助医療など、医療現場で生じる多様な問題を個別的に扱うと同時に、倫理委員会や倫理コンサルテーションなど、多様な問題を現場で扱うための仕組み作りにも取り組んできた。この講義では、生命倫理学が半世紀の間に積み重ねてきた知見の一端を、具体的なケースも交えながら振り返る。		
学部 共通 科目	卒業 研究	グローバル共創科学卒業研究	この授業では、卒業論文を作成し、その成果を社会へ還元する活動を行う。各コースの演習Ⅰ及びⅡにて調査・研究したテーマについて、その成果を総合知をもって卒業論文としてまとめることにより、総合知を創出・活用できる共創型人材としての集大成とすることを目標とする。 各コースの演習Ⅰ及びⅡにて、専門分野の異なる主指導教員と副指導教員による指導のもと調査・研究したテーマについて、その成果を卒業論文にまとめ、学内の卒業研究発表会にて発表するとともに、学会発表・学術論文発表、地方公共団体や企業、NPO等への政策提言などを行う。	共同

国立大学法人静岡大学 設置認可等に関わる組織の移行表

令和4年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員
静岡大学			
人文社会科学部			
社会学科	70	-	280
言語文化学科	75	-	300
法学科	90	3年次 2	364
法学科(夜間主コース)	30	3年次 3	126
経済学科	155	-	620
経済学科(夜間主コース)	30	-	120
教育学部			
学校教育教員養成課程	300	-	1,200
情報学部			
情報科学科	100	-	400
行動情報学科	70	-	280
情報社会学科	75	-	300
理学部			
数学科	38	-	152
物理学科	48	-	192
化学科	52	-	208
生物科学科	52	-	208
地球科学科	50	-	200
工学部			
機械工学科	168	-	672
電気電子工学科	110	-	440
電子物質科学科	110	-	440
化学バイオ工学科	112	-	448
数理システム工学科	50	-	200
農学部			
生物資源科学科	115	3年次 7	474
応用生命科学科	70	3年次 3	286
計	1,970	3年次15	7,910
静岡大学大学院			
人文社会科学研究科			
臨床人間科学専攻(M)	11	-	22
比較地域文化専攻(M)	10	-	20
経済専攻(M)	15	-	30
教育学研究科			
共同教科開発学専攻(D)	4	-	12
教育実践高度化専攻(P)	45	-	90
総合科学技術研究科			
情報学専攻(M)	60	-	120
理学専攻(M)	70	-	140
工学専攻(M)	322	-	644
農学専攻(M)	87	-	174
光医工学研究科			
光医工学共同専攻(D)	5	-	15
自然科学系教育部			
ナノビジョン工学専攻(D)	10	-	30
光・ナノ物質機能専攻(D)	9	-	27
情報科学専攻(D)	11	-	33
環境・エネルギーシステム専攻(D)	7	-	21
バイオサイエンス専攻(D)	8	-	24
計	674		1402

令和5年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
静岡大学				
グローバル共創科学部				
グローバル共創科学科	115		460	学部の設置(認可申請)
人文社会科学部				
社会学科	60	-	240	定員変更(入学定員△10)
言語文化学科	69	-	276	定員変更(入学定員△6)
法学科	84	3年次 2	340	定員変更(入学定員△6)
法学科(夜間主コース)	30	3年次 3	126	
経済学科	142	-	568	定員変更(入学定員△13)
経済学科(夜間主コース)	30	-	120	
教育学部				
学校教育教員養成課程	260	-	1,040	定員変更(入学定員△40)
情報学部				
情報科学科	98	-	392	定員変更(入学定員△2)
行動情報学科	69	-	276	定員変更(入学定員△1)
情報社会学科	68	-	272	定員変更(入学定員△7)
理学部				
数学科	38	-	152	
物理学科	48	-	192	
化学科	48	-	192	定員変更(入学定員△4)
生物科学科	48	-	192	定員変更(入学定員△4)
地球科学科	48	-	192	定員変更(入学定員△2)
工学部				
機械工学科	160	-	640	定員変更(入学定員△8)
電気電子工学科	110	-	440	
電子物質科学科	110	-	440	
化学バイオ工学科	110	-	440	定員変更(入学定員△2)
数理システム工学科	50	-	200	
農学部				
生物資源科学科	105	3年次 7	434	定員変更(入学定員△10)
応用生命科学科	70	3年次 3	286	
計	1,970	3年次15	7,910	
静岡大学大学院				
人文社会科学研究科				
臨床人間科学専攻(M)	11	-	22	
比較地域文化専攻(M)	10	-	20	
経済専攻(M)	15	-	30	
(うち、経済専攻から山岳流域研究院の内数とする入学定員数及び収容定員数)	【1】	-	【2】	※
教育学研究科				
共同教科開発学専攻(D)	4	-	12	
教育実践高度化専攻(P)	45	-	90	
総合科学技術研究科				
情報学専攻(M)	60	-	120	
理学専攻(M)	70	-	140	
(うち、理学専攻から山岳流域研究院の内数とする入学定員数及び収容定員数)	【1】	-	【2】	※
工学専攻(M)	322	-	644	
農学専攻(M)	87	-	174	
(うち、農学専攻から山岳流域研究院の内数とする入学定員数及び収容定員数)	【5】	-	【10】	※
光医工学研究科				
光医工学共同専攻(D)	5	-	15	
自然科学系教育部				
ナノビジョン工学専攻(D)	10	-	30	
光・ナノ物質機能専攻(D)	9	-	27	
情報科学専攻(D)	11	-	33	
環境・エネルギーシステム専攻(D)	7	-	21	
バイオサイエンス専攻(D)	8	-	24	
山岳流域研究院(M)	【7】	-	【14】	※研究科等連係課程実施基本組織の設置(R4.4事前相談)
計	674		1,402	

※山岳流域研究院(M)の入学定員及び収容定員は、人文社会科学研究科経済専攻(M)、総合科学技術研究科理学専攻(M)及び総合科学技術研究科農学専攻(M)の内数とする。